

あなたの生活と行政をつなぐ

Saku LIFE



広報佐久
平成28年2月



佐久の 先人 検討事業

「佐久の先人」第三次選定17人の紹介

瀬下 敬忠…………… P2	阿部良太郎…………… P20
佐藤 採花…………… P4	木内 高音…………… P22
小松 大…………… P6	岩田 健治…………… P24
早川 権弥…………… P8	清水鷹次郎…………… P26
岡部 次郎…………… P10	桜井 和市…………… P28
伴野文太郎…………… P12	油井 一二…………… P30
川村 八郎…………… P14	依田 勇雄…………… P32
三石勝五郎…………… P16	榎山 信…………… P34
神津 港人…………… P18	

先人の紹介文作成にあたっては、なるべくエピソードや写真を交え、読みやすさを考慮しております。
文献・資料や寄せられた情報を基に、正確な記述となるよう心掛けておりますが、万が一内容に事実誤認、問題等
がございましたら、文化振興課までご連絡ください。

佐久の先人検討委員会・佐久市教育委員会

佐久の先人たち③7

江戸時代中期の俳人・歴史家

瀬下敬忠

(1709~1789年)

東信濃に蕉風の俳壇を広め、俳文の世界でも横井
也有に肩をならべるような、豊かな知識と趣きをみ
せた。また、『千曲之真砂』などの歴史・地誌研究
にも大きな業績をあげた。

幅広い教養

瀬下敬忠は、佐久郡三塚村（現佐久市三塚）から、
江戸元禄年間に野沢村（現佐久市野沢）へ別家した
敬豊の子として、一七〇九（宝永6）年に生まれた。
父敬豊は、幕府陣屋の手代、岩村田藩の御用達をつ
とめ、書画・俳諧をたしなみ、弓・槍術などもす
ぐれていた。「閑鷗」の俳号で江戸から句集を出し、
漢詩や和歌作りなどの風雅も楽しんだ。

父の隠居後敬忠は、岩村田藩御用達役や野沢村年



貞祥寺境内の句碑、「花もなき柳や風の吹次第」と刻まれている

寄役をつとめ、藩の公務や村内外の紛争・公事（訴訟）などにかかわり、藩御用金の差し出し、野沢橋架けかえの争い、助郷諸伝馬役の割りふり、脇街道を通る参勤交代の本陣代役（人馬の移動・宿泊・接待）などで大わらわだった。
幼いころから父の影響を強くうけた敬忠は、父を訪ねる文人墨客や遊芸人にも接し、広い教養や芸能を身につけていった。和歌・俳諧や琴棋書画に親しみ、篆刻もおこない、謡・鼓・三味線をたしなみ、蹴鞠や賭弓（賭け弓）に熱中している。とりわけすぐれた業績をあげたのは歴史・地誌研究である。多芸多才な文人・歴史家だったといえよう。

俳諧・俳文の独自の世界

近年有志が貞祥寺に敬忠の句碑を建てたときの調査で、著作は七〇種以上と推測された。筆まめで手書きの稿本を多く残したが、印刷した板本が少ないのは、後半生の家産窮迫による資金難のためとみられる。その点『瀬下玉芝俳文集 鶴巢反古枕』は、翻刻・校訂もたしかで貴重な刊本である（玉芝は俳号）。
俳文『本覚田公終焉記』で、近くの本覚庵（寺）の徳田海田和尚から漢籍を教わり、俳句の手ほどきもつけたことがわかる。海田に捧げた「薬煮る成も涙に氷りけり」の追悼句は「祖翁」と敬慕した松尾芭蕉の『幻住庵記』に似ているといわれる。父閑鷗ゆずりの江戸立羽不角派の、雑多な形式と内容からなる遊戯的な俳諧である雑俳から脱け出て、蕉風復古と呼ばれる芭蕉の俳風の見直しをめざす江戸俳壇の流れに向かうのは一七三九（元文4）年ころからだった。

芭蕉の風雅の復興を目指す「五色墨派」の一人松木珪琳に入門したのがこの年、翌年に岩村田町（現佐久市岩村田）の有力俳友吉沢鶏山（好謙）をさそって入門させ、二人は交遊を深めようと俳諧集『ひなことば』を板行（印刷刊行）した。敬忠の姻戚の



稿本『鶴巢反古枕』の表紙装幀（瀬下敬忠の自筆）

大口屋空翠、服部黄鶴（敬忠の兄良之、空翠の妹へ入婿）も連句を寄せている。以後、佐久地方の俳壇は蕉風色を濃くしていく。

『鶴巢反古枕』の蹴鞠に夢中な俳文にはおどろく。「七夕の風やうらみの葛袴」と詠んで、七夕の昇級鞠会に敬忠は葛袴を着けて熱中していたのがわかる。蹴鞠がチームプレーだったため、蹴鞠仲間と俳諧連衆とは重なり合っていた。また、『源氏物語』『枕草子』『徒然草』などを自在に引いた猫談義は、いつの世もかわらぬ猫好きの存在をうかがうことができ

る。かつて井出一太郎も指摘したとおり、敬忠の俳文は尾張国の俳人横井也有の『鶉衣』をふまえていたのは明らかである。板行前から写本や稿本を読んでいたらしく、敬仰しながらライバル意識もあったようだ。好んで愛玩した大津絵への思い入れなどは、也有に勝っており、「大津絵や花はかはれど雪の色」の賛句がある。

●『千曲之真砂』と歴史家の一端

代表的な歴史書『千曲之真砂』は、信濃国全域の歴史・地誌研究で、『新編信濃史料叢書』のもので二〇〇ページにおよぶ。それは一七六四（宝暦14）年に一〇巻に編成したものを底本とする。佐久郡の古城について考証したなかから「野沢城」の項をとりあげ、歴史家敬忠の「く一端をかいま見てお

こう。

多く筆をさしているのは城主の伴野氏、一遍上人とその開基と伝える金台寺である。とくに詳しいのが、一七五七（宝暦7）年に、同寺が時宗の本山遊行寺（神奈川県藤沢市）から寄進された『遊行上人縁起絵』（第二巻、国重要文化財）についての記述である。この寺は敬忠の住家から東へ二百ほど、当時の住職は親しい蹴鞠仲間の一人で、寺庭には鞠場までつくってあった。

敬忠が記す「信濃国佐久郡伴野といふ所にて、歳末の別時紫雲はじめて立侍りける」以下の文章は、有名な縁起絵の詞書とぴったり一致する。さつそく住職から絵巻物の原本を見せてもらったにちがいない。詞書の筆者、絵の描き方、巻物の表装、巻軸の材質、料紙の古さや質までこまかく書きとめている。歴史家敬忠の面目躍如といった感がある。

敬忠自伝の『こよみぐさ』で、翌一七五八年に、第五二代遊行上人一海が金台寺へ滞在したこと（縁起絵へのお礼招待か）がわかる。さきの絵巻物のこまかい仕様は一海上人からも聞きとったかと思われる。ついでに推測をふくらませれば、そのとき敬忠は、金台寺住職ともども上人一行をまじえて、跡部村（現佐久市跡部）の踊り念仏を真見していたかもしれない。

敬忠が生きていたのは二百年以上も前のこと、その時代や生活をつかがう手がかりはあるだろうか。

屋敷のなかに鞠を蹴る鞠場や、弓を射るの場まで設けたという大きな家はどこにあったのか。郷土史家の市川武治は、野沢十二町（現佐久市野沢）の柳田呉服店（現株式会社やなぎだ）本社北、旧大草商店跡地で、いまは駐車場になっているあたりだったかと推定している。



瀬下敬忠碑、右は表面、左は裏面
（現在佐久市三塚の瀬下弥生氏宅へ移転）

○参考文献

- 『瀬下玉芝俳文集 鶴巢反古枕』古今書院 一九三七
- 『新編信濃史料叢書 第九巻』信濃史料刊行会 一九七三
- 『瀬下敬忠』瀬下敬忠句碑建設会 一九七九
- 伴野敬一連載「俳文集『鶴巢反古枕』を読む」

（『佐久』第68号〜第71号 二〇一三〜一五）

佐久の先人たち③8

幕末・明治を生き抜いた女流俳人

佐藤 採花

(1844~1901年)



明治維新という世相の大きな変革期を俳句一筋に生き抜いた女流俳人。全国を巡り自己を磨き続けたが、望郷の念強く、常に郷里に想いを馳せていた。俳句を通じて、佐久地方の文化に大きな足跡をのこした。

●業俳の道

佐藤採花は、一八四四（弘化元）年一月五日、江戸時代末期の中山道塩名田宿（旧中津村、現佐久市）の佐藤両八・きはの次女として生まれ、本名を「たつ」といった。

採花の幼少時代は江戸に出て、娘義太夫を演じながら父親と生活をしていたという。

一五歳の時帰郷し、北大井村八満（現小諸市）の俳匠小林葛古に入門し、その後塩名田で寺子屋を開

き、多くの門人を集め、その道の大切さを教えたという。再び江戸へ出た採花は、のちに明治政府の俳諧教導職となる橋田春湖に入門し、その後小森卓郎の内弟子となっている。やがて俳人池永大蟲と同居をはじめ、二八歳の時「蜂庵」と号した。

女性の業俳（プロの俳人）が少ない時代に、全国各地を廻り、多くの文人と交わることで自己を磨き、句の道をきわめようとした。この全国への遍歴により、剛毅な性格と、開拓精神の旺盛さが培われ、誰でも「刺す」ところからきたと伝わる「蜂庵」の号の由来からは、採花の気の強さがわかる。

当時俳句を作ることは、一種の教養や娯楽であり社交の手段でもあった。しかし女性として俳諧のなかで相応のポジションを占め、業俳として活動を続けていくのは決して容易なことではなかったであろう。明治期に発行された様々な業種に関する「番付」において、採花の名前はよく登場し、人気実力ともに兼ね備えていたことがうかがえる。

●今なお続く採花への想い

採花の遍歴は、北は北海道から東北地方一円に、また佐渡に甲州、京都にと続き、東京においてももちろん多くの人と交わり、自己を磨く旅となった。

俳人採花は二八歳のときに独立し、その後も全国各地を廻り知遇を得ながら、最後は東京浅草旅籠町二丁目二番地に定住し、ときおり塩名田にも帰って



塩名田に建立された採花の句碑「さえぎりや野山も匂ふ雨の跡」の句が刻まれている

きた。活動の様子などは、郷里に近い桜井の日本画家柳沢文真との手紙のやりとりからうかがうことができ

る。こうして東京を本拠地として活躍するも、一九〇一（明治34）年四月七日、浅草の自宅で五八歳の生涯を閉じた。墓は東京北区西ヶ原の昌林寺に建てられた。正面に刻まれた「蜂庵採花禅尼」の法名は、高名な高橋泥舟の筆による。更に翌年一周忌には谷中（東京都台東区）の全生庵に略伝と「汐時の是にもあるかちる桜」の作品を刻んだ大碑が建てられた。

郷里塩名田では、没後二〇〇年の歳月を経て「轉りや野山も匂ふ雨の跡」と詠まれた句碑が建てられた。朝な夕なに通る人々の心を和ませてくれている。

●季節豊かな表現

採花は、一八七五（明治8）年『袖日記』を、翌

年『穂あかり』を、一八八一年九州の築紫に赴くにあたり『こればかりは』を、と次々に世に出している。まさに東奔西走の日々を送り、更に一八八二年正月には、『歳日摺』を発行し、以後一九〇〇年まで毎年刊行した。

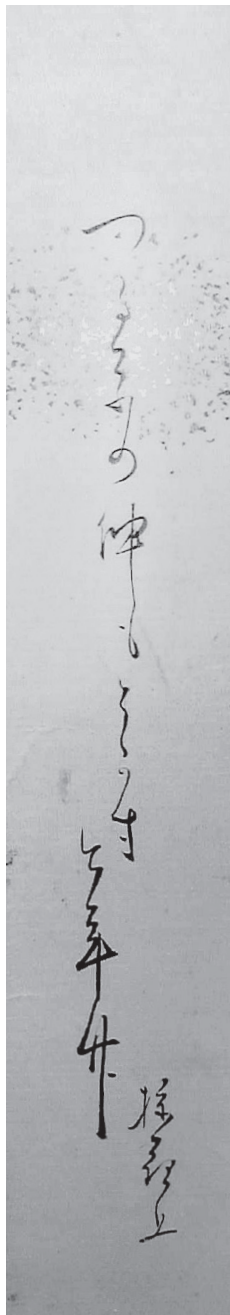
ここで採花の数多くの作品の中で、季節豊かな表現で詠んだ句から春夏秋冬の代表作を紹介し、次の世代に伝えたい。

- 春 ○味わいもはじめて苦し春の水（辞世句）
- 夏 ○たのしみも長き牡丹の苔み哉
- 秋 ○澄々て野山も月の名残かな
- 冬 ○花よりもこまかし枝にくぼる雪

●中山道宿場町塩名田宿と農村文化

塩名田の地は西側に千曲の大河を擁し、大雨のた

短冊に記された採花の筆跡



「つる草の 伸もとゝかず 今年竹 採花女
 つる草の 伸もとどかず 今年竹」

びに橋（昔は木や土の橋）が流失し旅人を苦しめてきた。道ゆく旅人は俳人達も多く、地元との交流も他と比較すると多かった。それは宿場ゆえに本陣や問屋が置かれ活発な交流がなされていたからである。しかし一世を風靡した俳人達も時と共に他界する。先達者に政山・柯則・鶏山があり、当時、李雪・素澄という二人の俳人が活躍していたという。当時の俳人層は庶民文化の原点であると解されているが、そこまで庶民には広まっておらず、武士や富商・豪農などに限定されていた。塩名田宿は中山道の繁華な宿駅であったから、他の農村部より早くから俳諧は浸透していた。

幕末には女流俳人として全国に知られた採花が登場し、明治期を色どり、文壇で活躍し、農村庶民文化を広めたのである。

戦後間もない一九五〇（昭和25）年一月に、中津中学校（現浅科中）新聞部が発行した『中津中学校

新聞 第四号』には、詩二〇人・俳句二五人・歌七人・作文二〇人と、思い思いの作品が並べられている。ここからも浅科地区の先人が残した文化の継承がみてとれる。



全生庵の句碑
 2メートルをこす大碑で、「汐時の是にもあるかちる桜」の句が刻まれている

今なお、上原地区の「土のうた」、矢嶋地区の「愛句会」、塩名田地区の「あすなろ」といった浅科地域で続く俳史会のクラブ活動が、伝統の一日を担っている。まさにその重みを痛切に感じる。

雪降る大碑に寄り添えば

詩の心が響く人情の里

虎雁

（佐藤治郎・虎雁）

○参考文献

- 長野県北佐久郡編『北佐久郡志』一九一五
- 浅科村史編纂委員会編『浅科村史』浅科村 二〇〇五
- 佐藤武利編『女流俳人蜂庵採花』二〇〇五

佐久の先人たち③9

地域づくりと自由民権に生きた医師

こまつ はじめ
小松 大

(1848~1895年)



幕末から明治という激動の時代に、医師として地域に病院をつくり、住民の生活向上をめざして学校を建設し銀行を設立する。自由民権運動にも力を尽した。

●岩村田藩の典医になる

小松大は、一八四八（嘉永元）年、中居村（現佐久市布施中居）に生まれた。父の良平は岩村田藩の典医を勤め、医科本道と眼科の名医として知られていた。小松は幼いころから梁川星殿門下の臼田王山に師事し、第一の秀才といわれた。一三歳頃より四年間佐久間象山に付いて蘭学を学び、父の後を継いで藩の典医になった。明治維新となり、中山道総督として佐久を訪れた岩倉具定（具視の子息）の許可

を得て、御影村（現小諸市）に、自分が学んだ西洋医学を伝えるため、医学館を設立した。

一八七二（明治5）年、入会地であった一ノ原・長者原など、合わせて六二万坪（二〇〇畝余）の払い下げを受けて開墾を計画し、村の農業発展に力を尽くした。

また、龍岡藩主だった大給恒が一八七七年東京に設立した博愛社（後の日本赤十字社）で、西洋医学を学んだ。信州に戻り、野沢（現佐久市）に病院を開設し、その後、松本で病院長に赴任し、各地で活動を広げたが、病のため布施村に帰村し、再び故郷で医療活動を始めた。一八八二年には北佐久郡医になっている。

●学校と銀行の設立

一八八〇（明治13）年、抜井に設立されていた尚志学校が中居に移転することになり、小松は布施村中居に共立学校を設立し、筆頭幹事になった。小松は地域の教育にも大きな関心を持っていたことを示している。

一八八一年には、資本金十二万円の布施銀行が設立され、小松はここでも中心的な役割を果たした（後に頭取になる）。布施銀行は佐久地方で最初に承認された普通銀行（他に小諸銀行）の一つであった。株主の範囲は、二八町村にまたがる二六二人で、本店は布施村に置いたが、支店を小諸に、出張店を

望月に、代理店を春日と下之城に設置した。しかし、米価の低迷や生糸の輸出困難などで銀行の経営は厳しく、やがて経営の中心は小諸支店に移っていった。小諸は「追分宿から分かれる北国街道最初の宿場町で、碓氷峠をひかえ、関東への要衝を占めたところから、関東物資をあつかう卸売商が発展し、商圏も長野から松本・諏訪方面まで広がっていた」。布施銀行は小諸の豪商と南佐久の豪農たちに支えられていた銀行であった。

●自由民権運動に参加

小松は医師としてだけでなく、地域の経済活動も振興しようと活動を広げ、やがて政治活動にも参加していった。西南戦争の後一八八一（明治14）年、板垣退助が自由党を結成し、国民の権利や自由獲得をめざす自由民権運動が各地に広がると、小松は一八八四年、自由党に入党した。しかし、秩父事件などもあり、政府の弾圧は厳しさを増し、自由党は一時解党せざるを得ない状態であった。

当時朝鮮は、日本と清国の対立を背景に動乱期にあった。朝鮮の政権内の対立に対して、日清両国が軍を派遣した。自由民権派は当初政府の朝鮮内政への干渉を批判したが、政府は清国の横暴を強調し、やがて民権派も、清国討つべしという主張が変わっていった。

●大阪事件にかかわって収監される

朝鮮と日本の自由民権の闘いを結合するため、朝鮮に渡って、清国と結ぶ朝鮮の事大党を倒し、独立党政権を樹立しよう、という計画が進められた。

佐久の自由民権派の中心にいた小諸の石塚重平は、この渡朝鮮計画の資金調達を担当していた。しかし、この頃は松方デフレ財政下の不況で有力な後援者も現れず、資金集めは困難を極めた。石塚は多方面に資金の調達を依頼し、かつてから知り合いであった



大阪事件公判廷の様子（元望月宿本陣 大森久芳氏提供）

布施銀行頭取の小松にも資金を頼んだ。一八八五（明治18）年、武器や爆発物も調達して朝鮮に渡ろうとした時、警察は関係者を一斉検挙した。小松も資金調達を理由に中之島監獄に収監された（大阪事件）。大阪臨時重罪裁判所での公判では、被告六一名で、小松に対する被告人尋問では「小松が『朝鮮事件』の計画を聞いてこれに賛同し、資金を出した」というものであったが、四ヶ月後に結審し、小松は証拠不十分で二〇名の被告とともに無罪となった。しかし、この事件も一つの原因となり、翌年布施銀行は解散した。

●北佐久医師会の初代会長になる

この裁判のあと、小松は郷里へ帰り、再び医師業に携わるようになった。一八九一（明治24）年、望月に済生病院を設立し、初代院長になった。開院式には、公立長野病院長、各村の村長、地元の開業医など数十人が集まり、諸氏の演説が行われて、大変盛会であった。その年、北佐久郡医師会（後の小諸北佐久医師会）が設立され、小松はその初代会長に推挙された。

一八九五年、日清戦争後の処理のための征台軍に軍医として従軍、台湾に渡ったが、翌年現地で病死した。死因はマラリアといわれ、享年四十七歳であった。

●人が健康に生きる権利を願って

小松は、幕末から明治という激動の時代に、医師として医療衛生活動に従事するかたわら、人間が健康に生きる権利を考え、さまざまな政治的状况を意識するようになった。開墾事業も銀行の設立も学校の設置も、村民たちの生活向上をはかろうとするものであった。身近な生活に根付いたところから深まった政治意識が自由民権運動への参加となり、当時反政府であった自由党に入党する決意となったと思われる。

自由民権運動の力も働いて、明治政府は一八八一（明治14）年、一〇年後に国会を開設する詔勅を出した。一八八八年東信有志懇談会は三八名が参加して総会を開き、国会開設を目前に選挙も意識し、東信友誼会という名称で、政社として届け出ることを決めたが、そこには小松の長男小松可貴も参加していた。長男も親の意志を継いでいたのであろう。

（吉川 徹）

○参考文献

- 望月町誌編纂委員会『望月町誌』第5巻 近現代
- 望月町誌刊行会 一九九九年
- 上原邦一『佐久自由民権運動史』三一書房 一九七三
- 長野県『長野県史』通史編第七巻近代一 長野県史刊行会 一九八八

肖像写真 小松つる子氏蔵

内らは立川の考えに賛同し、岩村田の万歳亭で東信有志懇談会を開いて、広く長野県下に同志を求めた。この運動は「信濃大懇談会」へと発展し、外務大臣井上馨の条約改正案の反対建白書となつて一八八七年に元老院政府へ提出された。代表として上京した権弥は、保安条例により、一年六カ月の東京退去を命ぜられてしまった。(一八八九年に解除)

●議員になつて自由平等の世を

権弥は新しい政治を実現するために、議員の道を志し、東信の有志に推されて県会議員に当選した。一八八八(明治21)年に信越鉄道が軽井沢まで開通したが、佐久は道路が狭く交通が不便であった。とくに佐久から山梨県や群馬県へ通じる道路は、狭くて曲つていたので、馬車や人力車が通りにくかった。これらの道を県の費用で拡げたりまっすぐに直し、千曲川を渡る頑丈な野沢橋の改修にも努力した。



岩村田遊郭のかめ屋(明治末頃)

権弥がとくに力を入れたのは廃娼問題であった。一八八九年に鼻顔稻荷神社近くに、六八人の娼妓をかかえた一〇軒の貸座敷からなる岩村田遊郭がつくられた。この女性たちは家が貧しかったために売られてきた人たちで、外に出る自由もなく、非人間的なあつかいを受けていた。権弥はこの年の通常県会に荻原政太と二人で廃娼議案を提出したが、一〇対二〇で否決された。そこで翌年に再び提案したが、一三対一五の僅差で敗れてしまった。

後に小諸義塾長になる木村熊二が佐久を訪れ、早川家と親しい交際をしていた。権弥も師と仰いで教えを受けていた。権弥とキリスト教佐久講義所の人々は、廃娼同盟をつくつて、娼妓たちの救出にたずさわり、寄付を募り解放への活動を続けた。

権弥は自由教会の設立や佐久教会初代長老をつとめるなど佐久地方のキリスト教の発展につとめた。

一八九八(明治31)年三月に行なわれた第五回衆議院議員総選挙で、権弥は五九四票を得て国会議員に当選した。県会では実現できなかった政治を目指して国会へ登場した。第二二回帝国議会では伊藤博文内閣が、選挙法改正と地租改正案を提出した。この法案は日清戦争による出費を補つための増税が含まれており、否決されて解散となった。その年の八月に行なわれた臨時総選挙では、権弥は立候補を立川雲平に譲つた。『佐久名流評林』には「その人の雅量に服しき」と書かれているが、立川の政治家と

しての力量に、自分の夢を託してのことであろう。その後権弥は、新しく制定された南佐久郡会議員に当選し、副議長・議長として、南佐久郡の製糸業や農業の発展に貢献した。

一九〇八年からは前山村長となつて、長い政治の経験を生かして村民の生活向上に尽したが、早川家の財産はほとんど使い果たしていた。

県政・国政・郡政・村政と、生涯を通して自由と平等の精神を貫き通し、廃娼運動に力を注いだ権弥を支えたのは、木村熊二の教えであった。

一九二一(大正10)年、権弥は六一歳でこの世を去り、貞祥寺の墓地に葬られた。

(小林 収)

○参考文献

- 佐久市志刊行会『佐久市志』近代編 一九九六
- 木内政太郎『佐久名流評林』 一九〇九
- 秋山彌助『南北佐久自由主義者の政治運動記録』一九三九
- 大井隆男『明治期における新思潮の受容』一九七九
- 『千曲』東信史学会 一九七九

佐久の先人たち④

ハワイ日本人移民団に尽した政治家

おか べ じ ろ う
岡部次郎

(1864~1925年)



若き日、ヒューマニズムに燃えてキリスト教会の牧師としてハワイに渡り、日本人移民団を守るために力を尽した。後半生は、郷里に戻り、衆議院議員となり、閥族打破、憲政擁護を求めて奔走した。

●夢の米国留学を実現

岡部次郎は、一八六四（元治元）年、岡部弥門・ひさの次男として、佐久郡春日村（現佐久市春日）に生まれた。小学校時代、利発で活発な子だったが、子ども十人を儲けた岡部家の家計は苦しく、中学進学への希望は実現できなかった。

しかし向学心に燃えていた次郎は、一五歳のとき元上田藩主恒川重遠の塾に入って漢学・漢詩を学び、小諸教会の真木牧師から英語と漢学の教授を受けた。

一八八三（明治16）年、一八歳になってさらに高い学問を求めて上京し、東京では有名だった中村正直（敬宇）の私塾「同人社」に入学し、英語を学び、欧米の学問に触れ、米国留学を夢見るようになった。留学する決心はしたものの、生活に追われていた次郎には渡航費もなかった。さいわい同人社などの協力で、一八八五（明治18）年に渡航できることになった。同じ船の客に、特許局の局長であった高橋是清（後の内閣総理大臣）がいた。長い航海の中で、次郎は高橋と接する機会を得、これが縁で渡航の旅は高橋に同行する形となった。オーklandでミッス・バンダゴー私立学校に通い、その後リフォルニアのボウエンス学園を卒業し、オーkland第一組合教会で洗礼を受けた。

●牧師となってハワイへ

ハワイには、古くからそこに暮らす人々（ファーストネイション）が

居たが、一八世紀に英国船が寄港して以来、多くのイギリス人・アメリカ人が渡来し、とくにアメリカの農園経営者が耕地を獲得して砂糖キビ栽培を始めた。こ



次郎がハワイに建てた教会。
今は愛知県の明治村に移築されている

の農園の労働者として、多くの日本人が渡航し、日本人社会は三万人に近い人口になった。彼らはハワイ砂糖キビ産業に大きく貢献したが、激しく過酷な労働を強いられ、日常生活は悲惨な状況で、暮らしても荒れていた。

このような日本人移民社会を救済しようと、オーklandの教会に派遣の依頼があり、一八八九（明治22）年、次郎はハワイ島ヒロに牧師として着任した。次郎はヒロの伝道所を中心に、散在する日本人移民のキャンプを訪問し、多くの貧しい移民に会い、英語を教え、聖書を語り、経済的援助もした。当時キリスト教新聞に載った次郎の書簡には「愚と貧は時々諸悪の父母と化身候事珍しからぬことに候。…小生の働きは伝道・教育・慈善の三部に分ち、教会の外に学校あり信徒共済会あり、学校は知識の開発を図り、共済会は慈善救助の事を司り、整然運動いたし候…」とある。

一八九〇年、日本人キリスト教会をヒロに建設した。ハワイアン・ボードの牧師たちは、次郎が二年足らずで教会を設立した快挙に驚いた。この教会は一九六五（昭和40）年に解体、日本に輸送され、現在は愛知県犬山市の明治村に海外移民史をものがる重要建築物として保存されている。

●ハワイ日本人移民団の地位向上を求めて

各国からの移民が増えるとともに、政治に暗雲が漂い、人々の心情は不安に満ちていた。ハワイ王国憲法で一度は認められた日本人参政権も、一八八七（明治20）年の憲法改正で失われてしまった。一八九三年、アメリカからの移住者が中心になって独自の市民軍を持った改革党を組織し、ハワイ臨時政府を設立し、米国との合併推進を図った。

次郎は、この機会に日本人移民の地位向上を求め、日本人同盟会を組織し、会長に就任した。同盟会は日本人参政権を求めて運動し、全委員連署で、外務大臣井上馨と自由党総裁板垣退助に建白書を送り、次郎は王朝派に加担しないよう、各地の移民団を説いて回った。その後の運動は日を追うごとに新しい政治実現への世論が高まり、王国政府は倒れ、ハワイ共和国が誕生した。一八九八年にはハワイ共和国はアメリカの保護領となった。

この運動の中で、次郎はハワイ新聞の主筆になり、次第に伝道活動から執筆や政治、経済に深い関心を持つようになっていた。

一八九五（明治28）年、ハワイで活動した七年間の牧師生活に別れを告げ、シカゴ大学に留学することになった。このとき次郎は二八歳。シカゴ大学には哲学や教育心理学で有名なジョン・デューイが教鞭を執っていたが、この教授の邸宅で二ヶ月間、次

郎は寝食を共にしたのである。大学ではデューイから倫理論理学・倫理心理学・政治倫理を学んだ。その後ロンドンに渡ってヨーロッパ各地を回った。

●議員となって護憲運動を推進

一八九九（明治32）年、次郎は一四年間の海外生活を終えて、祖国の土を踏んだ。立憲政友会総裁伊藤博文の推薦で、「北海タイムス」の主筆に任命され、札幌に居を移したが、次郎は社説論文を書くとき、郷里春日村に思いを馳せ、「鹿邨」という筆名を使った。一九〇四年日露戦争が勃発し、従軍を志願し、満州に出征した。

一九二二（明治45）年、政治に関心の強かった次



次郎の選挙応援に来た代議士たち。左から2人目が次郎。4人目が尾崎行雄

郎は郷里に帰り立憲政友会から衆議院総選挙に立候補し当選した。政界は未だ薩長閥が力を持ち、軍も影響を強めていた。世間では「閥族打破、憲政擁護」の運動が高まり、次郎も長

野県下で護憲運動を展開した。政友会が門閥政治に妥協したときには、尾崎行雄らと脱党して政友倶楽部をつくり、やがていくつかが合併して憲政会が生まれ、次郎はここに所属した。一九一七（大正6）年、寺内内閣の下で海軍参政官に任命され、党政務調査会長にも推された。一九二二年、次郎は外務省と協力して国際平和協会を設立し、その専務理事に就いた。この協会の綱領には、「本会は、国際正義と人道の大義に則り」「国際間の妄想偏見を一掃し、東西文化の融和を計り、支那米国其の他の各国と親善輯睦の実を挙げ、世界の平和に貢献し、人類の福祉を増進し、以て日本帝国の使命を全うせんことを期す」とある。

一九二五（大正14）年、病と事故が重なり、次郎はこの世を去った。六一歳であった。若き日々はヒューマニズムに燃えて世界を駆け巡り、大正時代は尾崎行雄らとともに、護憲運動に奔走した生涯であった。

（吉川 徹）

○参考文献

中野次郎著『疾走する鹿 信濃の国土岡部次郎伝』

一九九三

望月町誌編纂委員会『望月町誌』第五巻 近現代編

望月町誌刊行会 一九九九

佐久の先人たち④

小学校教員で融和教育の先駆者

とも の ぶん た ろ う
伴野文太郎

(1869~1934年)



長野県師範学校で校長浅岡一、教諭大江磯吉の感化を受け、郷里で先駆的な「融和教育」をおこない、晩年には県下初の赤十字少年団を結成させた。

● 県師範学校で名校長に会う

伴野文太郎は、一八六九（明治2）年、佐久郡跡部村（現佐久市跡部）に生まれた。桜井村（現佐久市桜井）の日遷小学校を終えて二年ほど英語を学んだ。教師は志賀村（現佐久市志賀）出身の神津国助で、慶應義塾を卒業し野沢村（現佐久市野沢）で英学塾（日曜義塾）を開いていた。英語の勉強をすめたのは小学校長成瀬利貞（旧小諸藩士族）だったとみられる。



恩師 浅岡 一

神津は福澤諭吉の啓蒙精神をうけつぎ、英語だけでなく広く進取・開明的な知識をも文太郎に授けようとした。一八八八（明治21）年、文太郎は、師の教えをうけて、長野県尋常師範学校（現信州大学教育学部）へ進む。同期生には三村安治、矢ヶ崎栄次郎（奇峰）、村松民治郎、小林照三郎など、のちに「信州教育」に名をとどめるような人材が多かった。こつした逸材を育てたのが名校長とつたわれた浅岡一である。浅岡は、福島二本松藩士として戊辰戦争に加わり、維新後は文部省勤務をへて広島師範学校（現広島大学）教諭となる。一八七四年には、上下議院を開き憲法を定めよという建白書を太政大臣へ提出し、和歌山県勤務などをへて、一八八六年に学務課長と師範学校長をかねて長野県へ赴任した。浅岡の人となりを知りさせたのは大江磯吉をめぐる人事である。大江を被差別部落出身と知りながら母校の長野県尋常師範学校訓導に抜擢した。その後推薦入学させた東京の高等師範学校卒業後すぐ長野師範学校教諭に任用した。一八九一年大江が帰任したとき、文太郎は浅岡の処遇に感じ入って、全校生

徒学友会で四年生を代表し歓迎の挨拶をのべている。そして大江から教育学や教授法を教わった。だが大江は、内外の差別の厚い壁にはばまれて、二年後に教壇を去らざるをえなくなった。

● 県下最初の融和教育を实践



明治26年当時の野沢尋常小学校

一八九三（明治26）年、文太郎は南佐久郡野沢高等小学校（現佐久市野沢小）へ赴任した。通勤途上心を痛めたのは、小学校に入れないでいる被差別部落の子供たちの姿だった。入校をかけた尋常小学校長がためらうと、憤激して教え子に黒板や机を地区内の一軒へ運ばせ、毎日放課後「出張教授」をおこなった。翌年さらに校長へ談判して同学を實現させ、同席をいやがる有力町民の子弟はあえて横並びにさせたといふ。

この先駆的な「融和教育」を文太郎は一九二一（大正10）年に、回想記「想起す二十有七年前」で公表した（『あけぼの資料集』所収）。世間の非難

や冷笑にたじろがぬ取り組みへのバネはなんだったか。生来の正義感はもとよりだが、師範生のころ身をもって接した、差別に苦しみ耐える教諭大江と「惻隱の情」(まごころ)で彼を遇する校長浅岡の姿が、二重写しで脳裏に強く焼きついていたのはたしかであろう。

文太郎を「奇人」あつかいしない親友はいた。同郷人で師範学校一年先輩の保科百助(五無齋)である。一八九九(明治32)年、上水内郡大豆島尋常高等小学校(現長野市大豆島小)の校長となった保科は、すぐさま被差別部落の分教場をなくして本校へ統合した。更級郡稲荷山尋常高等小学校(現千曲市稲荷山小)校長だった文太郎は、そのとき保科から「部落改善」を相談され、郷里での経験を語ってともに融和教育をすすめた、と回想記の最後に書いている。

この話題にはまだ後日談がある。一九一九(大正8)年、南佐久郡野沢町(現佐久市野沢)に「大正会」が発足した。県下最初の地方改善事業団体で、住宅・衛生の改善や各種組合の結成などに取り組んだ。町政首脳の並木齡輔町長と伴野忠一助役は、文太郎に連れられ「出張教授」に加わった教え子であった。かつての痛切な原体験が埋み火となって燃えあがったのであろう。薫染(よい感化を受けること)や化育(天地自然がすべてのものを造り育てること)といわれるもののあるべき姿がうかがえよう。

●勇猛果敢な暴れんぼう教員

一九〇九(明治42)年二月、文太郎は山口県阿武郡明倫尋常高等小学校(現秋市明倫小)の校長に任命された。だが翌年八月には辞めて帰県している。なぜなのか。筆者が家人から聴き取った伝聞によると、由緒ある同校は士族から転じた教員が多く人事が膠着していた。困った県当局は一計を案じ、人事刷新の大ナタを振るえる「歪勇校長」を信州から任用しようとした。白羽の矢を立てられた文太郎は、憎まれる「クビ切り役」の大任を果して「逃げ帰った」のだという。

明治末期から文太郎は、知事が坐る信濃教育会長職の教員への交代を叫びつづけた。一九一七年、上伊那郡中沢尋常小学校(現駒ヶ根市中沢小)校長のとき、信濃教育会の上伊那郡教育会総集会で、部長を会長からはすすよう緊急提案した。それで休職処分をつけ退職に追い込まれるが、翌年教員の投票で教育会長が実現する。同じ年佐久出身の盟友である佐藤寅太郎が、ついに選挙で信濃教育会長に就く直接の引き金ともなった。

文太郎は「いつでも辞表を懐に入れて」と豪語していたが、復職後もまだ話題をふりまいた。南佐久郡小海尋常高等小学校(現小海町小海小)校長時代、一九二五年に県下初の少年赤十字団(男女生徒一五八人)を結成した、と『信濃毎日新聞』が報

じて話題をよぶ。最後の北佐久郡軽井沢尋常小学校(現軽井沢町中部小)では、市町村立小学校教員の給与の一部を国が負担する「市町村義務教育費国庫負担法」(一九一八年成立)が逆に町村の自立性を失わせる、と怒って一九二七(昭和2)年にきつぱり校長を辞めてしまった。波瀾多い教員人生であった。



伴野文太郎と妻きくぢ
中沢小学校教員住宅にて(大正4年10月撮影)

(伴野敬一)

○参考文献

『あけぼの資料編』増補新訂版

長野県同和教育推進協議会 一九九五

伴野敬一「信州教育史再考」龍鳳書房 二〇〇五

伴野敬一「伴野文太郎小伝」連載

『佐久』第31～38号、二〇〇〇～二〇〇三

佐久の先人たち④3

戦後いち早く福祉事業を進めた町長

かわむら はちろう
川村 八郎

(1881~1961年)



太平洋戦争後の新憲法での住民による直接選挙の第一回統一地方選挙で町長に選ばれ、いち早く社会福祉事業の推進に取り組み、養老施設・知的障がい者施設を開設し、その後も組合立の救護施設を設置した。

●製糸工場の経営に関わる

川村八郎は、一八八一（明治14）年に製糸業を営む勝間村（現佐久市勝間）の川村清造と多いの間に長男として生まれた。

父清造は臼田製糸場と川村製糸場を創業しており、川村は成人すると家業を継ぎ、第一工場の経営をまかされ、第二工場の経営をまかされた弟の清と共に製糸業に勤しんだ。

しかし、この地方での製糸場は、明治時代から大

正時代にかけて、社会情勢の変化などにもない、合併や閉鎖を余儀なくされていた。このような中で川村は、製糸業をすべて清にまかせて上京した。清は信州明治館と名称を替えていたこの製糸場を昭和時代の廃業に至るまで経営した。

●衆望を担って町長に

日本は一九四五（昭和20）年に太平洋戦争に敗れ、それまでの憲法を改正し、主権を国民とした新憲法を制定した。新憲法の基では、新しく参政権が認められた婦人を含め、二〇歳以上の成人に選挙権が与えられた。

この第一回の臼田町の町長選挙が一九四七年四月に行われた。当時の臼田町の多くの人々は、川村八郎という町出身の優れた人物が町外にいるのに気が付き、東京在住の川村に帰郷をうながし、町長選挙に立候補してほしいと頼んだ。そして川村はこの選挙で当選して、町長となり二期八年と四か月つとめた。その後川村は、一九五七（昭和32）年四月に、臼田町・切原村・田口村・青沼村の四か町村が合併した臼田町の町長選挙に当選して、新臼田町の初代町長となり一期つとめた。

●町を福祉行政の先進地に

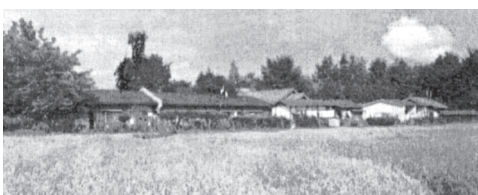
町長になった川村は、全国的にも県下でも早い取り組みである福祉事業に着手し、一九五一（昭和

26）年には、町の財政は厳しいといわれたなか、多くなってきた生活保護を受けている老人の救済を目的に、補助事業で養老施設の建設に着手した。

この養老施設借楽園（下小田切地籍）は「身体・精神・環境・経済的等の理由で、家庭で養護を受けられない老人、寝たきりの老人の入所施設」として一二月に開園となり、川村は園長を兼務した。

この園長の考え方が『臼田町公民館報』の一九五二年二月号に次のようにある。「養老院はこの世から見捨てられた者がいる所と考えられたりしているがそうではなく、これまで社会のために力を尽くしてきて、身寄りをなくしたり貧しくなった人たちのへ長い間ご苦労様でした」と休んでもらう〈休憩場〉である」と、人々に福祉についての認識を深めてもらうべく述べているのである。

その後の時代は福祉施設の建設など当然と考えられるようになったが、この福祉事業への川村町長の考え方は当時としては非常に先進的なものであったのである。



老人ホーム借楽園全景

借楽園は、一九七五年に場所を別の下小田切地籍へ移転し規模も拡大され、施設も一層整えられて、名称も佐久広域老人ホーム勝間園となるとも

に、特別養護老人ホームも増設された。施設が移転となった旧借楽園の跡地は老人の学習や保護を目的とした老人福祉センターとなった。

続いて、川村町長は国での法の制定を背景に、知的障がいをもつ子供のための精神薄弱児施設の設定を、議会の強い反対意見のあるなかではあったが進めた。施設は国の認可を受けて町立の白田学園（勝間地籍）として一九五六年に開設され、川村は初代園長になった。

この学園は知的障がい児の学習・生活の指導をして自立自活に必要な知識・技能を教育していくもので、翌年には白田小学校・白田中学校の分室を設け教育施設としての役割も担った。

現在の白田学園は一九八六年一〇月に北川地籍への新築移転に伴って、一八歳以上の知的障がい者を



白田学園

受け入れる施設として啓明園を併設した。

川村町長は白田学園に続き、一九六〇年七月に、身体上・精神上著しい欠陥があるため独立しての日常生活が困難な人に適切な生活扶助を行う救護施設清和寮（勝間地籍）の設置を、近隣町村に呼び

掛け組合立として開設させた。

この施設は、一九八〇年九月に白田学園近くの北川地籍へ新築移転となり、規模も拡大され勝間園を運営する佐久広域連合が業務を引き継いだ。

●「福祉の町」と称される

川村町長が早い時期に始めた老人福祉・児童福祉・障害者福祉・生活保護等の事業は、農村医療の佐久総合病院との連帯で一層充実・進展し、社会全般でいよいよ福祉事業が必要とされるようになって、川村町長の先見の明が讃えられるとともに、白田町は福祉の町と言われ評価を高めた。

そのほか、特筆すべき事業には水害の被害を防ぐための片貝川放水路の開削等があるほか、郡の町村会長の要職にも就くなど地方自治に貢献した。

また、川村は漢詩の書籍『千羊詩稿』を残したり、上京中の生活では得意の書で展覧会に入選したとの話も残す文人でもあった。

川村家の裏の勝間城跡の空堀にある道をステッキを持ちながら、役場へ通っていた好々爺という印象の川村町長の姿が懐かしく思い出される。

（丸山正俊）



清和寮



下小田切の白田老人福祉センターの庭に建つ「川村八郎（千羊）の漢詩碑」

○参考文献

白田町『白田町勢要覧』

一九六九・一九七四・一九七八・一九七九

白田町公民館『公民館報つすだ』第二集 旧白田町編

一九七八

白田町誌編纂委員会『白田町誌』近現代編 二〇〇九

佐久の先人たち④

佐久の生んだ大詩人

みつ いし かつ ご ろう
三石勝五郎

(1888~1976年)



「指庄しあつの心 母ごころ

押せば生命いのちの泉わく」

この旋律のよさは、まさに勝五郎の生涯そのものと言えるだろう。髭ひげのおじいさんと呼ばれ、ふるさと佐久をこよなく愛し、また故郷の人々に心から愛された放浪の詩人であった。

利発だった勝五郎も、それに十分応える学校生活を送った。その反面、再婚して隣村に住む生母を慕う心もおさがたく、母の暮らす集落の見える山土手に横たわっては夕焼けの空を眺め、流れる雲の姿にその面影を重ねて、多感な心の動きをそのまま詩によんでいった。

生来の大きな身体つきと、優れた学業成績で、勝五郎は野沢中学校（現野沢北高校）に進む。当時は交通の便もなく寄宿舎に入ったが、生徒らしからぬ行動も多く、たちまちリーダー格となっていた。

その頃の農民の暮らしは貧しく、制服も買えなかった勝五郎に、教師（舎監）の高松良は、たまたま着られた夏の制服を与え、一年中を過ごさせた。何はばかりことなく冬も夏々と夏服でいる勝五郎の才能を見抜いた高松との出会いがあつてこそ、後の田園の詩人三石勝五郎がつくられていく。高松は五年生の夏休みに長野の保科五無齋が主宰する保科塾に勝五郎をあずけ、様々な生活体験をさせる。たった一ヶ月のことではあつたが、その影響は大きく存分に詩心を動かしていった。

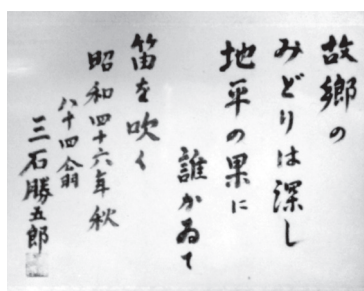
勝五郎はペンネームを「孤帆」としてたくさん詩を書き、一九〇七（明治40）年、中学在学中に処女歌集『歴史・地理佐久唱歌』を自分で働いたお金で出版する。世間がどう思つかなどということにこだわることもなく、まさに「我が道をゆく」勝五郎であった。

歴史というものは学ぶものでなく肌で知るものという勝五郎の理念は、その頑強な身体で佐久を隅々まで歩き、五一の町村を詩にして残す。現在、町村合併などで名称がなくなってしまう所も多いが、これらの詩は昔を知る貴重な歴史的財産でもある。

一九〇八年、野沢中学校を卒業し、早稲田大学予科に進む。入学の後も成績優秀、持ち前の闊達さで学生生活を過ごした。卒業の時読んだ「入学当時早稲田の森にカラスが鳴いていました。カアカアでございました。…」で始まる答辞は、未だに前代未聞の答辞として語りつがれている。

放浪と出会い

一九一四（大正3）年、白田の東信新報社に入社、すぐに『南佐久郡志』の編纂にかかわり、自分の足と



三石勝五郎の詩、白田稲荷山公園に詩碑が建立されている

目で確かめまとめた文章で、大いにその力量を発揮した。やがて仕事で朝鮮半島に渡るが、思わぬ病いを得て挫折し、一九一八年に帰国する。その後東京牛込にある南北社出版部に入社し、取材活動をしなからも、数多くの詩を文芸社に寄稿する。そこでサトウハチロー、武者小路実篤、西條八十などの親交が生れた。ことに京都一燈園（奉仕団体）の創始

生れながらの詩人

三石勝五郎は、一八八八（明治21）年に南佐久郡青沼村入澤（現佐久市入澤）に、父三石倉蔵、母いその長男として生まれた。一二歳の時、弟妹三人を残し母は父と話し合いで別れたため、生れつき体格のいい勝五郎は、弟妹の面倒をみながらの少年時代を過ごす。

後妻としてきた母とつは、長男だけはしっかり教育を身につけさせたいという思いが強く、もともと

者西田天香との出会いは、勝五郎の生き方にさまざま
 まな影響を与えた。天香に従って秋田県の田ノ沢、
 小沢の鉱山、十和田湖などで働き、路上での托鉢、
 便所掃除など無償の奉仕活動をし、青森、北海道、
 樺太の海岸までも放浪行脚をしながら詩を書いた。
 そつした自然のままを読む詩は広く世間に認めら
 れていったが、詩を金銭にかえたくないと相変わら
 ずの旅をつづけ、原っぱに遊ぶ子どもたちの中に入
 っていっては無邪気に遊びを共にする毎日だった。

●指圧の心 母はいい人

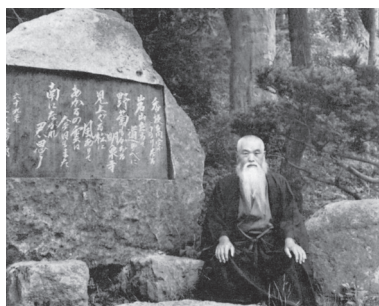
一九二五（大正14）年東洋大学哲学科で易经の講
 座を受講する。その一二月には東京小石川伝通院前
 大黒天境内に住み「福門堂易断所」を開設し、運命
 判断など易占業をはじめた。

その頃売れない指圧師がいた。浪越徳治郎である。
 戦時中東京大空襲の折二人は壕の中で知り合う。易
 も親指でさばく、指圧も親指だと意気投合し、ここ
 で『指圧の心母』ころ／＼押せば生命の泉わく』(こ
 の指圧讃歌は浪越の設立した日本指圧学院の校歌と
 なっている)という今でいう「マーシャル的」ことば
 の縁でテレビ対談が実現する。一躍世に知られるが
 勝五郎は心おこることなく肩からさげた頭陀袋に思
 いついた詩を書いては放りこんでいった。

●勝五郎と妻さく

千曲川・浅間山・蓼科山などなど、ふるさとの自
 然、そこに住む人々との交流は、出会った家の柱や
 庭にあつた板切れなどに墨痕あざやかに書き遺され
 ていった。

一九三三（大正12）年、勝五郎は三五歳の時、石
 川県金沢出身の宇野きくと結婚する。托鉢をしなが
 ら学校の便所の汲みとり奉仕などに精を出すかわ
 ら、すばらしい詩を書く勝五郎に心惹かれてのこと
 若い人たちは、夫唱婦随でなくお互いをしっかりと認
 めあつた暮しぶり、北海道まで新婚旅行をした二人
 に、奇異と羨望の目を向けた。子どもには恵まれな
 かつたが、きくの物怖じすることなく自分の意見を
 きちんとのべる姿に、多くの女性たちが、女性解放



明泉寺境内の詩碑と作者である勝五郎
 『摂政宮行啓地・信濃關伽流山』より

の糸口を学んでい
 った。勝五郎の詩
 作と共に、きくの
 佐久における女性
 としての活動の実
 績は大きなもので
 あつた。

●書物を昭和天皇に献上

一九三三（大正12）年、昭和天皇が摂政宮の時、

志賀村香坂（現佐久市香坂）の關伽流山明泉寺に立
 ち寄りられた。その記録をもとに『摂政宮行啓地・信
 濃關伽流山』を一九七〇年に出版し、宮中に献
 上した。たしかに天皇陛下のお手に渡ったかど
 か、その受けとり書を宮内庁からいただいたことな
 ど有名な話である。

一九七六年、勝五郎は辞世の詩を書く。

辞世の詩（抜粋）

信は万事の基をなす

命数天にありとも

信ずる国手に身をまかせ

何時果てるとも更に悔なし

百歳までも生きようとしていた勝五郎だがその意
 気こみは果たせず、この詩執筆の三日後の八月一九
 日に八八歳でこの世を去つた。

詩は「何時果てるとも更に悔なし」と結んであ
 った。詩の数一八〇〇余、著書『火山灰』『散華楽』
 など多数。（佐々木都）

○参考文献

三石勝五郎を語る会編・刊『三石勝五郎全詩集』二〇〇一
 宮澤康造編『三石勝五郎一人と作品』

三石勝五郎を語る会 二〇〇四

三石勝五郎『摂政宮行啓地・信濃關伽流山』

株式会社美術年鑑社 一九七〇

佐久の先人たち④5

佐久の洋画のパイオニア

神津港人

(1889~1978年)



負けず嫌いでブラない画家だと、彫刻家・斎藤素巖は評した。新しい流派が次々と日本に紹介された時代、潮流にのらず、写実志向を貫き豊かな色彩表現を展開した。佐久における洋画のパイオニアとして、郷土の美術文化に確かな足跡を残した。

●美術への目覚め

神津港人（本名港人）は、一八八九（明治22）年二月二日、北佐久郡志賀村（現佐久市志賀）に、神津豊助・たみ（旧姓小山）の次男として生まれた。本家は、「赤壁」の神津家と並ぶ佐久有数の資産家で、地域では「九郎兵衛さま」と呼ばれていたという。西洋式の神津牧場を開いた神津邦太郎は港人の従兄にあたる。志賀尋常小学校（現東小）に通っていた頃、長兄正之は東京の第一高等学校から

東京帝国大学（現東京大学）に進学していた。豊助は、下高井郡平穂村（現山ノ内町）の南画家児玉果亭や、岩村田藩士の息女で石版画家の岡村政子などの肉筆画を所有していた。港人は、東京で出版される新聞・書籍や、はやりの美術品に接することができる、文化的に恵まれた環境にあった。

学業は優秀であった。算術の時間は問題を解いたあと石板を裏返し、弁慶の絵を夢中になって描いた。豊助は、港人の姿を見て「絵描きにでもなるか」と時々声をかけたというが、親子の会話のことで、岩村田高等学校を卒業したら農業を継がせるつもりだった。

一方港人は、徐々に絵描きへの思いを強くしながら、一九〇二年、野沢中学校（現野沢北高校）に進学した。中学では、日本の洋画界創成期の画家、小山正太郎や浅井忠などが描いた鉛筆画の手法を目にし、その写実性に感心して独学で鉛筆画を学んでいた。中学四年の暑中休暇中、母親の遠縁で後に水彩画家となる小山周次に伴って、小県郡祢津村（現東御市）の水彩画家の丸山晚霞に会った。その後半年ほどは、日曜ごと、往復二キロを徒歩で通い、描きためた絵を見てもらった。中学校より遠い週一回の祢津行きがとても楽しみであった。いよいよ中学校を卒業する時に「晚霞の弟子になる。」と豊助に告げ、



『雪の日』1912年卒業制作
黒田らの外光派を良く表わした佳作
(東京藝術大学所蔵)

●写実的志向を貫いて

一九二二（明治45）年に美校を卒業した後は、帝

一・二年時は特待生となった。卒業制作の『雪の日』は、西洋画科で二席となり、学校買い上げとなった。

反対されたが、泣きながらも熱意をもって説得し、東京美術学校（現東京芸術大学）を受験することでようやく豊助の了解を得た。野沢中学校（第二回卒）から初めての美校受験生であった。

●東京美術学校を二席で卒業

美校の入学試験は、石膏像の木炭デッサンであった。イーゼル（画架）の使い方も知らなかったが、晚霞の指導を受けていたので合格するつもりで挑んだ。西洋画科の定員二五名に対し約一五〇名が受験し、港人を含む二八名が合格した。同級生に、斎藤知雄（後の素巖）、萬鉄五郎らがいた。

西洋画科では、黒田清輝、和田英作らに指導を受けた。港人はデッサンにも自信をもっていたが、実技指導では描いていたデッサンを和田に「黒いぞ」と言われほとんど消されてしまった。自信を失いながらも、優秀な学科の成績と持ち前の負けん気です

国劇場背景部で舞台美術制作をしたり、肖像画を描いて生計を立て、実家には戻らず画家の道を歩み出している。黒田の弟子らが創立した光風会展に出品し、一九一五（大正4）年には文部省美術展覧会に初入選を果たした。

一九二〇年十月に、農商務省商業美術研究生として渡英、ロンドンのロイヤルアカデミーやパリのアカデミージュリアンに学んだ。一九二二年八月からイタリア・ドイツなどに写生旅行、翌年四月に帰国した。

帰国後は、帝国美術院展覧会などに出品していたが、一九二八（昭和3）年、彫刻家に転向した斎藤素巖が帝展彫刻部に反発して創立した構造社に誘われ、団体内に設置した絵画部の主任となり、この団体の展覧会に出品した。



『豊穡』1929年作
構造社第3回展覧会出品
(佐久市立近代美術館所蔵)



『春や春』1963年作
第34回第一美術展出品
(佐久市立近代美術館所蔵)

巷会（一九三九年）・創芸協会（一九五〇年に緑菖会から改名）や、一九五七年に創芸協会と対等合併した第一美術協会の展覧会で作品を発表、会を主導した。

港人の画風は、美校時代に黒田らの指導により身に付けた外光派的写実、イギリス留学の経験から試みた構成画や裸体による構想画、戦後の自然主義的風景画を経て、晩年は印象派風の色彩表現へ回帰しているが、写実志向は一貫している。後期印象派・フォーヴィズムなど西洋から次々と新しい流派が日本に紹介された時代に抗して、潮流に流されず自己の表現を追求した。

素巖は、一九二九年の港人の個展に寄せてこう記している。「君は作画上において不快よりも快を、醜よりも美を好む。その主張は尚直裁である。お

つにひねらない画家である。つまりブラない画家である。」

一九七八年三月末日に風邪をこじらせて一週間ほど病臥の後、四月七日、息をひきとった。享年八八歳であった。

●佐久の足跡

港人は、長野県展の審査員など郷土の美術文化振

興にも係わり、佐久の洋画界をけん引した。自らの苦勞を顧みて、絵描きを目指す人に絵は教えないことを信条とした。一方で、関東大震災後に一時避難していた小諸で弟子となった内堀一男、農業画家として作品を残した佐藤利平、第一美術協会会員の大澤邦雄など、佐久の洋画家を育てた。

没後の一九八四（昭和59）年、信濃毎日新聞社から画集が刊行された。官制展覧会と距離を置き、参加した構造社の解散、太平洋戦争による緑菖会の中絶など、不遇な一面もあって正当な評価を受けてこなかったが、画集刊行のために、巻かれていたキャンヴァスは再び開かれ、画業の概要を顧みることができた。豊かな色彩と堅実な画面構成に再評価の議論が高まり、翌年には大回顧展が長野県信濃美術館・佐久市立近代美術館で開催されるに至った。

一九八六年一月には、神津親人ら志賀地区の有志によって、邦太郎が志賀村長時に建築した旧志賀村役場（明治34年竣工の擬洋風建築）の二階に「志賀文化会館美術展示場」が開設され、港人の作品を鑑賞できる場所となった。（現在は閉鎖されており、その作品は佐久市立近代美術館に寄託されている。）

（土屋 信）

○参考文献

神津琢自編集 『行先花ざかり 神津港人追想録』

神津恭介発行 一九八六

佐久の先人たち④6

けいはい
警廃事件で政治にめざめた浅間町長

あべりょうたろう
阿部良太郎

(1894~1966年)



青年会長として岩村田警察署廃止反対運動の先頭に立ち、民衆の声を無視する官僚政治を正そうとした。太平洋戦争後は岩村田町・浅間町の町長として、農業用水の改良や上水道の敷設に力を入れ、町民の生活向上と民主化に尽した。

●青年会長として活躍

阿部良太郎は、一八九四（明治27）年、岩村田（現佐久市岩村田）本町で文具店を営む阿部亀助の長男として生まれた。幼いころから学業に秀れ、岩村田から遠い野沢中学校（現野沢北高校）へ下駄（げだ）ばきで通い、勉学にはげんだ。当時の岩村田には農学校はあったが「中学校出の人材」は少なく、卒業すると、佐久銀行に勤めた。

大正期の岩村田は、明治初年から北佐久郡役所を

はじめ、警察署・裁判所・税務署・営林署などがおかれ、北佐久郡の政治の中心地として人々が集まる町であった。いっぽう小諸は、大きな商店が並び製糸場が発展して、商工業の街としてにぎわいを増していた。

町の青年会に入って、読書をしたり人生の理想や町の発展について語り合っていた良太郎は、若者たちの信頼を集め、青年会長となり、さらに北佐久連合青年会長となつて青年たちのリーダーとして活躍していた。

●岩村田警廃事件が起る

一九二六（大正15）年六月三〇日の夜、岩村田の町中に大きな衝撃が走った。西本町に町民の寄付を加えて新築したばかりの警察署が廃止されるといふ電報が、長野新聞社から市川市助町長のもとに入ったからであった。町長はその夜「町の盛衰にかかる重大事件が勃発した」と町役場二役・議員・各団体長を緊急に召集して協議した。集った人々は「郡役所そして今度警察署が廃止されると、商店の収入や町の財政に大きな影響が出る」と東京と長野の関係官庁や政党へ「廃止反対の陳情」をすることを決めた。この運動の先頭に立ったのが、良太郎を中心とする青年会の若者たちであった。彼らを蹴起させたのは、梅谷光貞県知事が「警察費の削減のために警察署を廃止する」と言いながら小諸分署を警察署に昇

格したことであった。さらに六月の県議会では「ご希望は十分に研究して大事に」と見せかけの発言をしておきながら、七月一日に突如として廃止の発表をした。町民たちは県知事と竹下豊次警察部長の態度に、激しい怒りと憤りを持った。



岩村田警察署へ向かう群衆
(中信毎日新聞社より)

七月三日と五日に岩村田小学校で開かれた町民大会では、県や中央から帰つた陳情隊より、政治家や官僚たちの冷たい応対を聞き、町民はがっかりしていた。それを聞いた森泉三代太翁が「町難今にして至る。憂国の士よ起て。青年よ蹴起せよ」との激に、若者らは奮起した。七月一七日の夜に開かれる郡民大会に向けて、良太郎ら若者たちはハイヤー三台に分乗し、「暴政の敵梅谷知事を葬れ!!」とメガホンで叫びビラを配りながら村々を廻つて、警察署復活の協力を人々に訴えた。

●長野騒擾事件と良太郎

一九二六年七月一八日、長野市で岩村田・屋代・中野の三町が合同して、警察署廃止反対の県民大会

を開くことになった。岩村田では各戸一名が出席することになり、朝から「警察署廃止反対」の標をかけた町民が西本町から駅へと集った。良太郎ら一班は午前五時五〇分発、二班は八時三〇分発の列車で長野に向かった。長野駅前に整列した一班は、三台のハイヤーを先頭に十数本の幟をなびかせ、ビラを配りながら中央通りを北へ向かって進んだ。

天も許さぬ梅谷の、この暴政を何と見る

吾等に正義の剣あり、彼官族をなぎ倒せ

二班は折から長野駅に着いた屋代隊と合流し、県町通りを北進し、知事官舎前で演説を始めた。その時群衆の一部が、警官の制止を破って邸内になだれ込み、梅谷知事に暴行を加え、ひたいに傷を負わせた。勢いあまつた群衆は、さらに警察部長官舎を襲い、重傷を負わせて、県民大会場へ向かった。県民大会は午後一時から権堂の相生座で開かれたが、参加者が多くて入りきれないので、城山公園に移して行い、三町の警察署の復活を決議したが、それだけで終わらなかった。

大会が終わって中央通りを南下する群衆は、松橋久左衛門議員宅・小山邦太郎議員（小諸選出）宿泊先の犀北館・県会議事堂へと押しかけた。

郡民大会の決議書を、知事に渡す役目を帯びていた良太郎は、知事官舎へ向かった。知事は日赤長野病院へ入院したあとだったので、秘書に手渡して帰途についた。列車の中には私服の刑事がいて、群衆



岩村田警察署の復活を喜ぶ町民

の話聞いていた。

七月二五日の早朝、良太郎は「多数を指揮して率先騒擾の勢を助けた」との理由で逮捕され、長野拘留所に收容された。

裁判では懲役五カ月を求刑されたが、無罪の判決を受けて、自由の身になった。この事件は良太郎の愛町精神と民権政治への強い志を育てた。岩村田警察署は復活し、知事と警察部長は罷免された。

●新しい民主政治をめざして

一九三一（昭和6）年から足掛け15年にわたる長い戦争は、軍部の横暴の下に人々は苦しい生活を強いられていた。戦いに敗れ、新しい民主主義の時代がくると、良太郎は長い間抱いていた新しい政治の実現に向かって町長に立候補した。

一九四七（昭和22）年、良太郎は岩村田町長に当選し、敗戦によって食糧不足に苦しむ町民の生活の改善や学校の整備に力を注いだ。二期目になって町民の生活が安定してくると、民意に沿った町政を

心がけ、道路の改良、地下水を利用した水道、総合病院の建設と、町民の生活安定に力を発揮した。

とくに力を入れたのは岩村田が古くから苦しんできた農業用水のコンクリートによる改修であった。千ヶ滝・常木・三河田用水は御代田・小沼など浅間山麓の村々と協議を重ね、井出一太郎農林大臣の助力もあって大きく進んだ。北佐久郡の水不足は解消し、田植えが早くなり、米の収穫は増えた。

一九五九年、良太郎は、町村合併後の浅間町長に当選すると

○町職員は誠実をもつて事務に精励せよ

○町民に対して親切丁寧・真に公僕たれ

と、警廃事件以来持ち続けた愛町精神をもって、町民ひとりひとりの心を大切にする町政を行った。

良太郎は一九六六年、新しい佐久市の発展を祈りつつ、七一歳でこの世を去った。

（小林 收）

○参考文献

岩村田町報・浅間町報・中信毎日新聞・信濃毎日新聞

騒擾被告事件記録（佐久市志資料）

長野県野沢北高等学校記念誌編集委員会編

『高原の日は輝けり』同創立八〇周年記念事業実行委員会

一九八八

肖像写真提供 阿部 誠氏

佐久の先人たち④7

宮澤賢治の才能を見出した童話作家・編集者

きうち たかね
木内高音

(1896~1951年)



鈴木三重吉が創刊した『赤い鳥』に数多くの童話を執筆するとともに、中央公論社編集者として三重吉の『綴方読本』、豊田正子の作文を集めた『綴方教室』をはじめ、川端康成・久保田万太郎・国分一太郎・坪田譲治・小川未明などの作品を世に送り出した。

●鈴木三重吉との出会い

木内高音は、父富之助が鉄道敷設の測量技師の仕事をしてきた関係から広島県尾道おののみちに生まれる。産声が大きくてこの名がついたという。神戸、小樽おたると移り住み、一〇歳より父の故郷である北佐久郡志賀村（現佐久市志賀）で過ごし、野沢中学校（現野沢北高校）から早稲田大学英文科へ進む。

一九一三（大正二）年、夏休みで佐久に帰省中に、『国民新聞』に連載中の鈴木三重吉「桑の実」みぎくわを読



「お耳の薬」
（『赤い鳥』第11巻第4号
1923年11月）

み、「私は、たちまち、はげしい三重吉熱にとりつかれ、まだ、そうたくさんはなかった三重吉の著作を買いあさりはじめた」ことにより三重吉宅に入りし、大学卒業後、赤い鳥社に入社し、三重吉から創作の指導を受ける（『実践国語』第1巻第8号）。

一九二三（大正12）年一月、三重吉が一九一八年七月に創刊した『赤い鳥』第11巻第4号に「お耳の薬」を発表する。以後、『赤い鳥』が第22巻第3号（一九二九年三月）をもって休刊になるまで、「やんちゃオートバイ」「コージャ物語」「熊と車掌」「水菓子屋の要吉」など三〇編の童話を発表、復刊後の『赤い鳥』にも童話一編とエッセー二編を寄稿した。

三重吉は、木内の作品をめぐったに寝なめなかつたが、「人形つくりの話」（第19巻第6号、一九二七年二月）は、言葉を尽して褒めたという。

●宮沢賢治の才能を最初に見いだす

『赤い鳥』に作品の掲載を希望した宮澤賢治は、

一九二二年頃に上京し、三重吉と面会した。三重吉は「たしかに、変っていて、面白いことは、面白い。しかし、子供のよみものとしては、『赤い鳥』には、向かない」と、直接賢治に伝えたという（『赤い鳥代表作品集3』）。また、「タネリはたしかにいちにちか噛んでみたやうだった」に対しては、賢治と同郷で、賢治と三重吉を仲介した菊池武雄に、「おれは忠君愛国派だからな、あんな原稿はロシアにでも持っていくんだなあ」と述べた。

しかし、木内は、賢治の作品を評価した。編集会議における木内の評価を耳にした菊池は、「東京人ではじめて賢治童話を認めた」人物として、「その名を忘れることができなかった」という（『年譜宮澤賢治伝』）。

賢治の作品が『赤い鳥』に掲載されることはなかったが、一九二四年二月に自費出版に近い形で出版された『注文の多い料理店』（挿し絵と装丁は菊池が担当）の広告は、『赤い鳥』に無料で掲載されることになり、三重吉の指示で木内が広告を担当した。『赤い鳥』第14巻第1号（一九二五年一月）には、「読む人の心を完全に惹きつけねばおかぬ真面目さと自信を以て」という小見出しと、「東北の曠野やを走る／素晴らしい快遊船かいゆうせん（ヨット）だー」という内容の広告が掲載された。



『赤い鳥』第12巻第3号
(鈴木三重吉追悼号)
木内の童話・追悼文・赤い鳥の歴史が掲載されている
(1936年10月)

●木内の苦惱—望みは作家

木内は一九二九(昭和4)年七月、中央公論社に入社し、出版部長を経て、雑誌『婦人公論』の編集長となる。この間、三重吉『綴方読本』(一九三五年)、『赤い鳥』に掲載された豊田正子の作文を集めた大木頭一郎・清水幸吉『綴方教室』(一九三七年)をはじめ、川端康成『級長の探偵』・久保田万太郎『二に十二をかけるのと十二に二をかけるのと』・塚原健二郎『子ども図書館』・国分一太郎『戦地の子供』・坪田譲治『じハの実』・小川未明『雪来る前の高原の話』などの名著を、次々と世に送るなど、名編集者としての名声を得た。

しかし、一九三三年一月、中央公論社に入社し、編集部配属された藤田圭雄は、木内の想いを次のように述べている。

何事にも一見識持った、うるさ型の正義派であり、同時に気の弱い、小心なところもあった。ジャーナリスト的なところはほとんどなく、社にあっても、出版部で、こつこつと美しい本を

作り上げているという存在だった。

酒席での木内さんは悲しかった。文句をいいながら、姿勢を正して気取ってのんでいる間はたのしい。ところがある量をすぎすと、変って来た。そこにあるのは自棄と絶望である。木内さんの本来の望みは作家であることだった。現在の境遇にあっても、心がけ一つでは作品活動も不可能ではない。しかしそこへ踏み切れない自分の怠慢と臆病に腹が立つのだ。木内さんの高い鑑賞眼からすれば、自分よりずっと腕の下の者が、どしどしと世に出て行く。そうしたものに對する嫉みと怒りが木内さんの酒を哀しいものしていた。

(『日本児童文学』第13巻第3号)

木内の「本来の望みは作家である」ことがうかがえる。

●故郷佐久への想い

戦後は、日本新聞協会に勤めるかたわら、『赤とんぼ』(実業之日本社)、『銀河』(新潮社)、『少年少女』(中央公論社)、『子供の広場』・『少年少女の広場』(新世界社)、『童話教室』(桐書房)、『子どもの村』(新世界社)に童話や小説を精力的に執筆した。また、『建設列車』(川流堂書店)、『やんちゃオートバイ』(中央公論社)、『スフィンクス物語』(明日香書房)、『無人島の少年』(小峰書店)などの童話単



『やんちゃオートバイ』
中央公論社1949年

行本も出版した。

未刊のまま終わった短編の連作『佐久の地図』は、『寒雀』・『送別会』(『赤とんぼ』)、『痛快』(『日本児童文学』)、『佐久の地図』・テニスと古海先生(『白象』)と藤田圭雄が保存する生原稿「佐久の地図—連合マツチのあとさき」からなり、中学生時代を過ごした佐久での寄宿舎生活を中心に、生母との死別、義母への反発、父や友人のこと、そして雄大な故郷佐久の風物が描かれている。木内は出版の希望をもっていたといわれるが、かなわなかった。

(伊藤純郎)

○参考文献

- 与田準一ほか編『赤い鳥代表作集3』小峰書店 一九七五
- 長野県野沢北高等学校校記念誌編集委員会編『高原の日は輝けり 野沢中・北高史』一九八八
- 堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』中公文庫 一九九一
- 和田登『民話の森・童話の王国』オフィスエム 二〇〇二

佐久の先人たち④8

子ども・農民・村を愛したヒューマニスト

岩田健治

(1897~1961年)



子どもたちの個性を尊重し、自主的・民主的な教育を実践する中で、二・四事件で検挙された。免職後は農村の立て直しに信念をもって尽した。

「世の毀誉（そしることとほめること）に恐るゝことなく一日の名誉を捨てゝ永久の名誉を追ふ」（岩田の日記より）

●一〇六日間の獄中生活

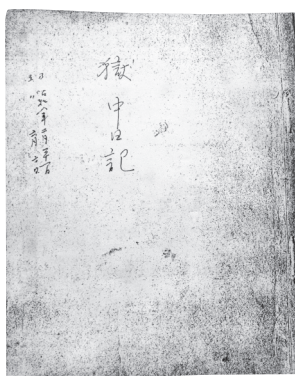
岩田健治は、南佐久郡田口村三分（現佐久市田口）の中農自作農の雛太郎とやすの二男として生まれた。一九一八（大正七）年三月、長野県師範学校一部（現信州大学）を卒業。四月に赴任した東筑摩郡岡田村岡田尋常高等小学校（現松本市岡田小）を始め、五校の教壇に立ち、一九三二（昭和七）年三五歳の若さで高瀬尋常高等小学校（現高瀬小）校長に抜擢された。妻かつとの間に敏子、すみ江、英

子、静子の四人の子がいる。この岩田の人生を一変させる事件がおきた。

「二月二十一日火曜日朝、まだ寝ている時に、駐在巡查河原田氏が来宅、『岩村田署に来て戴き度い』とのこと、『任意出頭にして、警察への出頭は今日の午後にしてもらいたい』と告げた。巡查が警察に問い合わせたところ、『任意ではない強制的だ』と叱られたというので、（中略）朝食を急いで済まし、妻に安心せよと言って立った」（『獄中日記』昭和八年二月二十一日・至同六月六日）表記の一部を現代語訳に改めた）

高瀬小校長岩田

健治は、この日から釈放となる六月七日までの一〇六日間、岩村田警察署の留置所と長野署に拘留され、学校に顔をみせることなく校長職を解かれた。



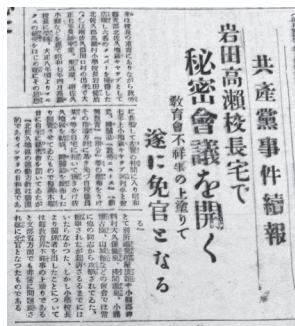
『獄中日記』

●岩田を学校から追放した「二・四事件」

なぜ、現職校長の岩田が検挙のうえ懲戒免職になったのだろうか。それは、一九三三（昭和八）年二月四日、治安維持法違反としてあらゆる社会運動の芽を摘み、国民を戦争へと動員する戦時体制作りをめざした「二・四事件」によるものであった。治安維

持法とは、天皇主権体制を維持するために、「国体の変革」や「私有財産制度の否認」という思想の持ち主や行動を取り締まる目的で一九二五年に制定された。一九二八年には最高刑を死刑にした。

斎藤実内閣は、この法律に違反しているとみなした政党や団体の動きを徹底的に弾圧した。対象となった代表的な団体は、日本労働組合全国協議会（全協）と全国農民組合全国会議（全農全会派）である。この弾圧は、長野県では二月四日から始まった。



『中信毎日新聞』
昭和8年9月16日

学校関係では、自由主義教育などを目指した全協下の非合法組織日本一般使用人組合教育労働部（教労）や合法組織の新興教育同盟準備会（新教）にかかわっているとみなされた小学校六二校、実科中学校四校の教員たちで、総勢二二〇人におよんだ。北佐久郡下では、高瀬小の岩田をはじめ岩村田尋常高等小学校（現岩村田小）五人、平根尋常高等小学校（現平根小）一人が検挙された。県下で唯一人現職校長である岩田が拘束された衝撃は大きかった。

●自由主義教育からプロレタリア教育へ

岩田は、三月二日の『獄中日記』に「一体俺等

のしたことが何が悪いと言った。全くわけがわからぬ。(中略)文化運動―教育革新運動―その何所が悪いのだ。世の進歩と共に歩み、世の文化と共に進まんとする所に教育の意義がある。進歩のない所、発展のない所に若き生命の教育が置かれるか。おお、時代は恐ろしい反動だ」と書きしるした。

大正五、六年ごろから長野県師範附属を中心に、教員の行動を束縛せず、子どもたちの個性や能力に応じて学習活動をするという「長野独自の自由教育」が広がった。岩田の教育観はこの中で育まれ(『新教の友』第5号)、一九二三(大正12)年には「自分は社会主義思想の円満な発達と社会が革新されることを望み、冷酷な圧迫と迫害を加えるものに対して、強い反抗心を禁じ得ない」と記すようになる。(『岩田日記』)

この考え方は、一九二八(昭和3)年次席指導として赴任した岩村小でさらに深められ、一〇月には有志で歴史研究会を立ち上げた。この会は「弁証法研究会」とか「マルキシズム研究会」などと名称を変えながら断続的に続けられた。その中から編み出された四つの教育方針は、一九三三年、最後の赴任先となった高瀬小でも実施された。

- ① 教育的環境をよくしていく。
- ② 大衆に親しみ大衆をゆり動かすこと。
- ③ 日に日に新たな教育をして、学校の空気を一新していく。

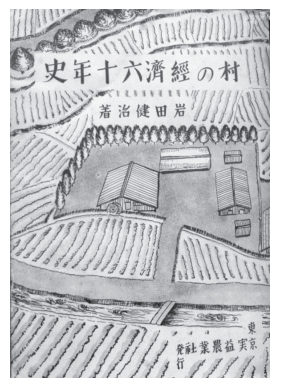
④ 児童の学校内組織をつくり、その運営を自主的に民主的なものにする。

こうした研究会や地域と共に歩み、子どもたちの自主的・民主的な教育活動をしていた岩田を、新教・教労の運動に結びつけたのは、上田市立尋常高等小学校(現上田市清明小)代用教員で教労上小地区責任者河村卓であった。岩田は、一九三三年七月七日結成された教労佐久地区の責任者となり、活動を効果的に発展させるためには、非合法の教労活動よりは合法の新教活動を主張した。それにもかかわらず特別高等警察(特高)は、治安維持法違反として検挙した。この二・四事件を契機に、長野県は、国策への協力を強め、満蒙开拓青少年義勇軍を全国で一番多く送り出す県となった。

● 新たな門出―農民・農村と共に―

免職後岩田は、不当に拘束された青年教員の一日も早い復職を内務省に申し述べるため上京したが、新しい道を求め悩んだ。手をさしのべた友人の北原龍雄から「農村小学校の教員は、農村を思索する人でなければならぬ」と勧められ、一九二〇年代から国内外の農業・農村論を読破し研究してきた成果を『村の経済六十年史』として、一九三四(昭和9)年に実益農業社から刊行した。

近代日本の農村経済は、どのような歩みの中で「何が村の経済を奪ひつゝあるか」「育ちつゝあるの



『村の経済六十年史』

かなぜ行き詰まったかを解明しようとした労作である。出版の願いは、自作農以下の農民によって農村を立て直すことにあった。

その思いをもって一九四六(昭和21)年、南佐久農民組合連合会や田口村農民組合を仲間とともに設立し、組合長として活動した。戦後は、日本共産党に入党し、一九四七年四月の第一回の衆議院議員総選挙では日本共産党公認で立候補、翌年の参議院議員選挙にも立候補し、志を遂げようとした。子どもや農民を愛し続けた岩田は、一九六一年三月三日に胃がんで亡くなった。(小平千文)

○参考文献

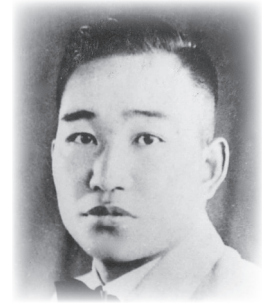
- 岩田健治著『村の経済六十年史』実益農業社 一九三四
- 二・四事件記録刊行委員会編『抵抗の歴史 戦時下長野県における教育労働者の闘い』労働旬報社 一九六九
- 青木孝寿『岩田健治』(信濃毎日新聞社編集局編『信州の教師像』一九七〇)
- 南佐久農民運動史刊行会『南佐久農民運動史』(戦前編・戦後編)一九八三・一九九〇

佐久の先人たち④9

大正に設立されたプロ野球団の主力選手

しみず たかじろう
清水鷹次郎

(1899~1931年)



日本のプロ野球第一号と伝えられている読売巨人軍よりも、13年も早く「日本運動協会」が誕生した。その野球チームの主力選手。昭和のはじめ、佐久への郷土訪問野球で好プレーを披露。満場の野球ファンをうならせた。

●巨人軍より一三年も早く

清水鷹次郎は、北佐久郡高瀬村（現佐久市鳴瀬）の出身。一九一九（大正8）年、野沢中学校（現野沢北高校）を卒業して北佐久郡三井小学校（現東小）教員となった。勤めて一年ほどたったある日、「野球見習選手募集」の新聞広告に目を奪われた。広告主は日本運動協会というが、聞いたことがない団体だ。

好きな野球で「メシが食える」と、清水はすぐ



大正時代に誕生した日本最初のプロ野球「日本運動協会」の精鋭たち。後列右から3人目が清水

にこれに応募した。選考の末、選ばれたのは清水ら一四人で、東京芝浦に専用球場が用意され、一九二二（大正10）年に球団は正式にスタートした。読売巨人軍が誕生したのは昭和9年、それより一三年も早い。

一年余りのキャンプのあと、協会球団は一九二二年六月、活動を開始した。国内で対戦相手がないので、朝鮮・満州への遠征を行い、京城（現ソウル）、奉天（現瀋陽市）、旅順（現大連市旅順口）など七都市で一七戦して二勝、まずまずの成績をおさめた。

対戦相手に希望した学生野球は、協会球団を「商売人野球」とさげすみ、対戦に応じなかった。ただ

早稲田大学だけは、野球部長の安部磯雄教授（後に社会大衆党委員長）が「同じ野球人だ」といつて対戦に応じた。

こうしてプロ対学生野球の一戦は、一九二三年の九月九日、芝浦球場で行なわれた。入場料は一等一円・二等五〇銭という史上初の有料試合で、試合は経験深い早稲田に一日の長があつた。敗れたとはいえ、常勝早稲田に肉薄した協会球団に大きな拍手が鳴り止まなかつた。

●男は野球、女は歌劇

この試合に刺激されたのか、当時奇術で大活躍の天勝一座が野球団を組織した。この球団ははじめプロかアマか、はつきりしなかつたが、たまたま実業団で最強を誇る大毎野球団を破つたことから、プロ球団に仲間入りした。その第一戦が、一九二三（大正12）年、朝鮮の京城で開かれた。協会は投手の不調から、6―5と痛恨の負け、三日後に再度試合を挑んで3―1で雪辱した。そこで改めて内地での決勝戦となり、八月三〇日芝浦で行われた。

日本初のプロ対プロの試合というだけに、この日の芝浦球場は満員の盛況だった。試合は協会が終始リードし、5―1で戦いを決した。破れた天勝は、このまま引き下がれないと、再試合を申し入れた。だが天勝にとってはこの試合が最後のものとなった。三日後の九月一日の関東大震災で、東京は一瞬のう

ちに焦土と化し、芝浦球場は軍によって強制収容され、復興資材の置き場となった。もう野球どころではなくなった。

この事態に対し、かねてから野球の将来に関心を寄せていた大阪の阪急電鉄社長小林三三は、「男は野球、女は歌劇」と、宝塚に球場を設け、協会球団をそっくり引き取った。球団は「宝塚運動協会」として再生し、清水は新球団の主将に選ばれた。

宝塚球団は大震災一年後の秋から本格的活動をはじめた。まず東京帝国大学を除く東京六大学との対戦だった。この頃になると、対戦を拒んでいた東京の大学も応戦するようになった。結果は二勝二敗一引き分け、五分五分の成績だった。



関東大震災でチームは解散、かわって「宝塚運動協会」に移籍。
前列左から2人目が清水

一九二五（大正14）年六月、球団は四回目の大陸遠征を行った。このときの結果は二五勝一敗、まさに連戦連勝だった。この戦果を土産に九

月には、アメリカ遠征から帰ったばかりの実業団最強のチームである大毎野球団と対戦し、10―3で大勝した。これを機会に大毎野球団とは、翌年から三回戦の定期戦を行うようになった。

●佐久クラブと18―0

宝塚球団は佐久にも遠征している。一九二八（昭和3）年六月、野沢小学校グラウンドで、黒沢富次郎（後の衆議院議員）ら佐久の野球好きの集りである佐久クラブと対戦し、18―0という大差で大勝している。清水にとっては「郷土訪問野球」となった。当時の記録によると、観衆五千人、佐久では無敵の同クラブも、宝塚には歯がたたず、安打は宝塚17本に対し佐久6本、三振は14個も取られ、プロの力をまざまざとみせつけられた。

この年、世界はかつてない不況に見舞われた。野球界にも大きな嵐で、期待していた後続のプロ球団も不況で絶望的となった。そのうえ、好敵手だった大毎野球団は、オーナーの毎日新聞社が、全国の実業団野球振興のため、都市対抗野球を開催することになり、これに吸収された。

この人気カードの解消と不況で、宝塚球団を運営する阪急主脳部も、球団解散を決めた。日本運動協会として設立して七年、この間の成績は三二二勝一三二敗一四引き分け、勝率は七割九厘だった。一四人のメンバーで設立した球団に、最後まで立ち

会ったのは清水らわずか四人だけだった。

球団解散後の清水は、福井商業学校（現福井商業高校）の野球部監督に迎えられた。当時福井県中等野球は敦賀商業学校（現敦賀高校）の全盛時代だった。清水は「打倒敦商」をめざし立ち上ったが、就任三年目三三歳でこの世を去った。その死の床には野球人にふさわしくユニフォームがかけられていたという。



対戦相手を求めて大陸へ遠征する宝塚運動協会チーム、下関港にて。
後列右から3人目が清水

（中村勝実）

○参考文献

中村勝実『近代佐久を開いた人たち』櫛 一九九四
佐藤光彦『もうひとつのプロ野球』朝日新聞社 一九八六

佐久の先人たち⑤0

ドイツ語学者の学習院長

さくら い わ いち
桜井和市

(1902~1986年)



戦後、一般にも開放された学習院で、院長に選ばれたドイツ語教授。戦時中の“海軍院長”、戦後の“一高院長”の後をうけ、新時代にこたえた“国際人院長”だ。

●松高合格、二人の絆

桜井和市は、南佐久郡岸野村（現佐久市）の生まれ。一九一九（大正8）年、開校したばかりの松本高等学校（現信州大学、以下「松高」と略称）に、第一回生として入学した。この年、野沢中学（現野沢北高校）から合格したのは桜井と小西謙（岩村田出身）の二人で、ともに松高から東京帝国大学に進んだ。戦後、小西は初代の長野県教育長として六三制の県内教育制度を完成させた。

二人の絆はそれだけではなく。小西はこのあと学習院女子短期大学次長に迎えられ、桜井とともに四年制の学習院女子大学昇格への道筋をつくった。

桜井はドイツ語学者。そのきっかけは松高入学のさいの、外国語選択にあった。「英語は中学でみっちりやった。これからはドイツ語だ」と、迷うことなく第一外国語にドイツ語を選んだ。

東大でも在学中から「ドイツ語の桜井」の声望は高かった。その卒業を待って、当時の松高校長は、「ぜひ母校のドイツ語教師に…」と、東大に申し入れた。勿論東大でも大賛成。早速これを本人に伝えると、「松高はどうも…」と言って断った。桜井の話によると、その理由は「遅れて入った中学時代の同級生がまだ松高にいる。とても教壇に立てない」という。

それではと、次に指名されたのが静岡高等学校（現静岡大学、以下「静岡」と略称）で、ここに一二年間勤めた。一九三七（昭和12年）年、文部省の在外研究員として一年間、ドイツに派遣され、帰国するとすぐ、学習院教授となった。

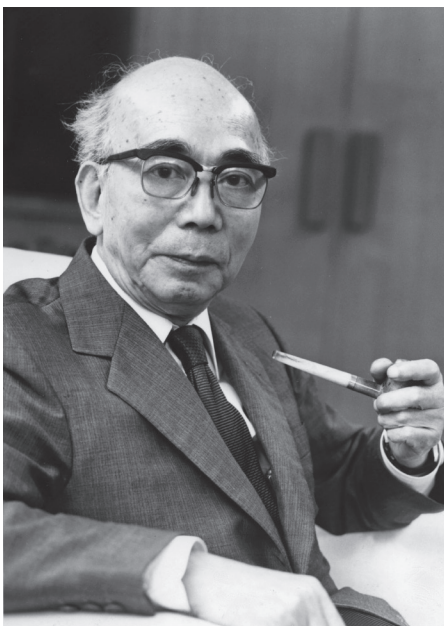
●ラジオでドイツ語講座

学習院は、一八七七（明治10）年、皇族と華族、特に許された官界・財界の子弟のために、東京に設けられた教育機関で、終戦まで宮内省（現宮内庁）が管理していた。男女別々の学習院があり、初等・

中等科のほか、男子学習院には旧制高校と同クラスの高等科があった。

桜井が初めて教壇に立った頃、生徒の中には三島由紀夫（本名平岡公威）がいた。院内では一番の人気者で成績も抜群、級長も務め、すでに文芸雑誌などには「三島」のペンネームで創作を発表していたほどだった。だが身体は薄弱で、教練のときなどは、三八式銃が肩に重そうで痛々しかった。

戦後学習院は、宮内省からの管理を離れ、私立学校に衣がえし、広く一般にも門戸が開放された。高等科が母体となって、一九四九年には、学習院大学が発足した。院長は戦時中、海軍きつての良識派の声が高かった野村吉三郎・山梨勝之進（いずれも海軍大将）、戦後は旧制第一高等学校長・文部大臣を務めた安倍能成が就任、全国の国公私立を通じて第



「国際人院長」の期待を受けて学習院長に就任の桜井
学校法人学習院提供

一級の充実した大学となった。

米軍の占領も終わり、講和会議によって日本も国際社会に復帰すると、NHKのラジオから「ドイツ語講座」が流れた。これは終戦直後の人気番組「カムカム英語」にならったもので、次はドイツ語だーと開始された。講師は桜井で、当時は「外国語なら



学習院創立一〇〇周年記念式にご臨席の天皇・皇后両陛下に開会の挨拶をする学習院長の桜井

学校法人学習院提供

何でも…」という風潮が高い時代だけに、爆発的な人気をばくした。とくに若い人たちから歓迎された。

●三代の天皇ご一家迎え

桜井は、一九七〇（昭和45）年、麻生機次院長（最後の一高校長）のあとを受けて学習院長に就任した。任期は三年で、四期二年にわたって院長を務めた。その間の最大行事は、学習院の創立百周年の記念行事で、院長の仕事はまず、寄付金集めだった。

普通の学校と違って、ことは学習院、その目標額も五〇億円に達した。百年記念事業委員会は一九七三年、発足したが、その直後の石油ショックにより経済が混乱し、期待していた財界も模様ながめの姿勢となった。このとき、強力な協力者が現われた。松高時代の同窓生、堀田庄三住友銀行会長と、静高時代の教え子、小山五郎三井銀行会長である。堀田は桜井を連れて松下電器の創業者松下幸之助などに当たり、小山は銀行協会をまとめ、多額の寄付の根回しをしてくれた。

記念式典は一九七八（昭和53）年一〇月一八日、この日、天皇（昭和天皇）、皇后両陛下をはじめ、皇太子（今上天皇）ご夫妻、学習院大学に在学中の徳仁親王（現皇太子）はオーケストラの団員としてご列席した。皇室三代が公の場所にご同席は初めてのことだった。

昭和天皇から「これを機に関係者一同は気持ちを新たにし、学園が長い歴史と伝統の上に立って、さらに進展を加え、その使命を達成するよう努力することを望んでやみません」との言葉を賜わった。桜井にとっては終世忘れられぬ感激であり、「全く一期一会の行事であった」としている。

一九八一年八月、桜井は四期目の任期満了を機会に院長を退任した。その後は一五年ほど前から手がけていたオト・ベハーゲルの著書を、『ドイツ語学概論』として翻訳完成に当たった。メンバーは八人で、大学を出たばかりの若かった者も、一五年の歳月は重く、いずれも大学教授となっていた。この本は一九八二年二月に完成した。桜井にとってはこれが最後の仕事となり、一九八六年一月二日、八三歳で死去した。

（中村勝美）

○参考文献

長野県野沢北高等学校記念誌編集委員会編

『高原の日は輝けり 野沢中・北高史』一九八八

佐久の先人たち⑤1

故郷に美術館を贈った実業家

ゆ い いち じ
油井 一二

(1909~1992年)



上京して様々な職業を経験するが、画商の道に活路を見だし、さらに美術年鑑社長として、天性の企画力と実行力により成功し、そのコレクションの寄贈を受け佐久市立近代美術館が誕生した。

●上京して絵画の出張販売員に

油井一二は、一九〇九（明治42）年一〇月三〇日、北佐久郡三井村香坂（現佐久市香坂）の農家に生まれた。一五歳で三井尋常小学校（現東小）を卒業し農業に従事するが、一八歳の時肋膜炎にかかり、約四〜五ヶ月の療養を余儀なくされた。その間将来への思いを巡らし、姉をたよって上京することを決意する。一九二八年五月、一九歳の油井は上京し、姉の夫の経営する電気工事会社に勤めた。

一九二九年、二〇歳のとき徴兵され、翌年宇都宮の野砲第二〇連隊に入営する。しかし翌年には帰休除隊となり、上京して東京中野にあった東亜美術協会に絵画出張販売員として入社する。二二歳の油井にとつて、これが美術業歴の第一歩となった。

この仕事は、数人が一組となつて、渡された数十本の掛け軸を訪問販売するというもので、初めての担当地区は横浜、三島、小田原方面で、約三週間であつと五、六本が売れた。その後担当地区は朝鮮に移つた。油井はこうした経験のなから商売のコツを先輩に学び、自信を得ていった。

●独立して美術店を開業

油井はその後東洋美術協会に移り、一九三三（昭和8）年、市瀬アイ（通称愛子）と結婚する。二五歳の一九三四年、油井を含めて三人の出資により日東美術協会を創設、独立する。ここでは販売を一手に引き受け、日本各地はもとより中国、朝鮮、台湾にも足を伸ばし、文字通り東奔西走で事業を伸ばしていった。

しかし、一九三七年に日中戦争が勃発し、二度目の召集を受けて中国に派兵となり、日東美術協会は休業状態となった。一九三九年九月、二年の野戦勤務を経て帰郷すると、一〇月には日東美術協会の事業を再開する。他の二名の出資者はすでに手を引いていたため、これが油井の真の意味での独立となつ

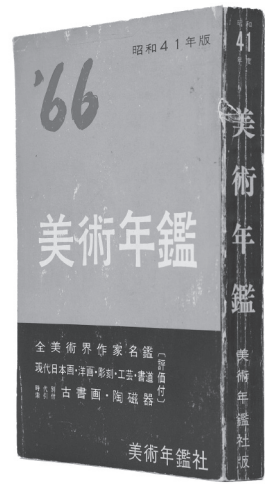
た。一九四一年、売りに出していた上野広小路電停前の薬品店を買い取り、念願の美術店を開業する。

●戦後の再出発

一九四五（昭和20）年三月一〇日、東京大空襲のため店舗を焼失し、郷里香坂に疎開するが、六月一五日に三度目の召集を受け、九州の佐賀関の山砲隊に配属となり、八月一五日の敗戦をむかえる。郷里香坂に帰ると、妻が肺結核で病床についていた。懸命の看病も及ばず、翌年七月二二日に死去した。その年の九月、小諸の塩川志んと再婚し、翌年に上京して上野の寛永寺子院の修禪院の一角に間借りして、肖像画の受注も含め絵画販売を再開した。一九五二年には絵画販売会社香菊社を設立し、このころから同業者の紹介で武者小路実篤の作品を扱うようになった。三鷹の武者小路邸に足繁く通ううち、実篤を人生の師として敬慕するようになる。

●画商から美術年鑑社経営へ

一九四七（昭和22）年、油井は画商として戦後の再起を図っていた時、休刊していた『美術年鑑』の創刊者山田正道から復刊の相談を受け、これに五〇万円を出資する。一九六五年、山田から五〇〇万円で権利を買い取り、『美術年鑑』の発行人となり、翌年にはこれを株式会社組織変更し、代表取締役社長に就任する。こうして油井は絵画販



油井が初めて発行者となった『美術年鑑』の昭和41年度版

売の地方廻りをやめ、出版人としての歩みを始めた。油井には画商としての経験から、こうした年鑑類に対する作家、画商、そして美術愛好家それぞれの立場からの要望を考慮する蓄積があった。そしてカラー絵の導入、大判化など企画内容の充実をはかり、ブランドとしての『美術年鑑』を大きく育て上げていった。

一九七一年には、カラー版美術情報紙『新美術新聞』を創刊。『美術年鑑』と『新美術新聞』を柱に、日本の巨匠シリーズ『横山大観』『川合玉堂』をはじめ多くの美術書の出版を手がけ、美術専門出版社として経営を伸ばし、一九七八年には美術年鑑社関西営業所を大阪市西区に開設した。

●美術館設立の夢

昭和三〇年代に入ると、日本の高度経済成長を背景に業績は益々好調となった。この頃から油井は、「自分の好きな作品が集まるにしたがって、自分一人の力で美術館を建てよう」という夢を抱くよう



平山郁夫 作『仏教伝来』(佐久市立近代美術館所蔵)
平山は、学徒勤労動員中に広島で被爆。29歳のとき白血球減少で悲観する中、祈るようにして生まれた作品。後に展開するシルクロードなどの仏教画の第一作。三蔵法師がインドから経典を持ち帰る苦難の様を描く。2009年79歳で死去。

になった。」と著書『片目の達磨 続風呂敷画商一代記』で述べている。後に佐久市に寄贈され、佐久市立近代美術館開設の母体となった油井一二コレクシオンに含まれる作品は、一九五五年から一九八三年の間に制作された作品が、それ以前のもの約十倍の数を占めていることから、この期間に油井が美術館の実現に向けて美術品の蒐集に力を注いだことがうかがえる。なかでも、一九六二年、平山郁夫という有望な作家がいるということで、東京都板橋区のアトリエを訪ね、その場で一九五九年院展出品作の『仏教伝来』と翌年出品作品の『天山南路(夜)』を、それぞれ四〇万円で購入受けたと先の著書に記している。これが、油井コレクシオンの中でも佐久

市立近代美術館を代表する作品となった。

●油井コレクシオンを佐久市立近代美術館へ

一九七五(昭和50)年二月、油井は佐久市新庁舎竣工を記念して蒐集美術品二五点を佐久市に寄贈した。二年後には寄贈作品は七〇点を超し、油井一二コレクシオンを収蔵する美術館建設の機運が熟していった。こうして、一九八三年五月、佐久市立近代美術館が開館した。

一九八九年には、油井に佐久市名誉市民の称号が贈られた。翌年四月、佐久市立近代美術館にカルチャー館油井一二記念館が併設され新装開館。この年一〇月、油井は取締役会長に、長男一人が代表取締役社長に就任した。二年後の一九九二年七月二日、油井は東京の病院で八二年の生涯を閉じた。現在、佐久市立近代美術館の収蔵品は、油井父子二代にわたる寄贈によって、三千点を超えている。(小山雅比古)

○参考文献

- 油井一二著『風呂敷画商一代記 商売から得た人生の苦楽』(株美術年鑑社 一九八八年)
- 油井一二著『片目の達磨 続風呂敷画商一代記』(株美術年鑑社 一九九〇年)
- 田中曰佐夫著『現代の美術コレクター』(日本経済新聞社 一九九五)

佐久の先人たち⑤2

財政再建を成し遂げた初代佐久市長

よ だ い さ お
依田勇雄

(1911~1993年)



県議会議員から初代佐久市長に転身。当時財政赤字が生じ、財政再建団体であった佐久市を再建に導く。優れた先見性をもって、北陸新幹線・高速道路誘致を働きかけるなど、佐久市の創世期を担う。

政治家を志す

依田勇雄は、一九二一（明治44）年、平賀村（現佐久市平賀）で代々酒造業を営む家の次男として生まれた。専修大学に学び、卒業後生家にて、長兄俊雄とともに味噌・醤油等の醸造業に従事した。一九四一年太平洋戦争が勃発し長兄は出征した。勇雄は家業の傍ら、かねてよりの夢であった家具木工製品の良質化に取り組み、翌年平賀木材工業株式会社を設立した。この年長野県会議員の議長経

験者である上田市の滝沢一郎の六女園と結婚した。一九四四年には千葉工兵隊に入隊し三カ月勤めた。一九四六（昭和21）年、井出一太郎の衆議院選挙を、同じ酒造業である酒造組合として手伝い、その手腕を買われ県議会議員に推された。翌年、三六歳という若年でありながら南佐久郡選出長野県議会議員に当選し、以来三期二二年間地方自治の振興に努力し、常に県民の福祉と教育文化の向上に精力的な活動を続けた。

昭和の大合併で市政を担う

一九五三（昭和28）年に町村合併促進法が、一九五六年には新市町村建設促進法が制定され、全国で昭和の大合併が始まる。佐久地方においても合併の機運が高まった。この合併は、南・北二郡に分離した明治以来培われた郡民感情や、行政上および実務上の相違という難題を抱えていたが、一九六一年ようやく北佐久郡に属する浅間町、東村と南佐久郡に属する中込町、野沢町の越郡合併により旧佐久市が発足し、依田は初代市長となる。

合併で各町村が新市へ持ち寄った赤字は四億七千万円余りと、市年間予算に匹敵するものであった。前途は厳しく、当初、自主再建を掲げているものの、自治省（現総務省）の見解では、「全国でも一・二を争う稀にみる赤字団体」であった。「予想外の財政悪化に財政再建法の適用以外に再建の途



橋場公会堂の前に建立された胸像

その必要性を市民にも訴えた。市民団体等の反対もあったが、佐久市は最終的に議会の承認を経て準用財政再建団体となる。

再建計画案は、「①市の財政規模からすると赤字解消には十六年を要する計算になるが、これを九年内に短縮する。②全国の類似都市に比較して職員数が二〇人多いが、当面八〇人減員する。③旧町村内にあった補助費を整理統合して法定基準内にとどめる。」というものであった。

印刷物は全て手刷りで裏紙を使用、業者への発注は廃止し、職員の超過勤務手当、消費的経費の抑制策を講じたほか、職員組合の猛反発にも関わらず連日連夜にわたって組合交渉を行い、八二名に及ぶ職員の人員整理を大英断をもって実施した。

財政再建団体から脱却

依田は土地改良・農業振興・河川改修・学校・保育園の建設などの諸事業を積極的に進めながらも八年の歳月をもって膨大な赤字を解消させた。

なし。早期健全を図ることが唯一の民生安定の途である。」として、依田は市財政事情を公表し、

市民の生活水準の向上と市の発展を図るには、既存企業の育成は勿論、新企業の誘致が必要として六〇畝の工場専用地を造成し、優良企業・大企業の誘致を積極的に進めた。また市内三つの商店街の近代化を図り、岩村田地区、野沢地区については、防災街区造成事業にあわせた近代化を、中込地区は、中込駅前を含む橋場地区を中心とした三〇畝に及ぶ区画整理事業を実施した。



竣工当時のグリーンモール

中込橋場は佐久甲州街道千曲川の船の渡し場に由来し、一九一五（大正4）年佐久鉄道開発後に市街地を形成していたが、一九六九（昭和44）年に小売店や住宅が密集し道路が狭く防災面から

も区画整理の必要性を地元商店会から提唱され、依田は様々な問題を解決しつつ、一九七三年からの事業実施に手腕を発揮した。特に他にあまり例のなかった幅一八呎・延長四一二呎の歩行者専用道路であるグリーンモールを設置するなどして、全国の注目を集め、多くの視察団が訪れた。

さらに国保浅間総合病院の整備充実を図り、数々の予防医療を実施する。特に脳卒中死亡者が全国のトップにランクされていたなかにおいて予防策として、健康管理センター、医師会の連携によって高血圧の早期発見、冬の一部屋温室づくり運動や減塩運動を展開し、一九八四年には脳卒中死亡者は市発足当時の半分以下、全国平均をも下回ることができた。また、佐久平上水道企業団の設立、公共下水道事業の推進、佐久市開発公社の設立による佐久平カンントリークラブ・佐久平国際射撃場の開設など多くの公共事業を実施した。

●市庁舎建設と将来展望



新しく建てられた8階建ての市庁舎

佐久市発足の市庁舎は、市内の高校等から払い下げられた建物やプレハブ造りの仮庁舎で、夏には屋根に木の枝を乗せて暑さを凌ぐといった状況であったが、ようやく市政

一五周年記念を兼ねた市庁舎落成式典が一九七六（昭和51）年に行なわれた。

また、佐久市の将来を展望するとき、交通網の整備進展が産業開発につながるとして国道254号線の内山峠整備、北陸新幹線・関越自動車道上越線（上信越自動車道）の佐久通過実現のために積極的に国に陳情し、一九七三年には念願の北陸新幹線の整備計画が確定し、今日の佐久市発展の礎を築いた。

一九八三年二月、長年にわたる功績に対し、佐久市名誉市民第一号として称号が授与された。

昭和の大合併を経て準用財政再建団体としてスタートした佐久市であったが、八年間という短期で再建。四期一六年間ひたすら市民の福祉と都市基盤の整備に、日夜寝食を惜しみ奔走した。また強い信念と類まれな先見性をもって、市の将来を夢に描き、その実現に身をささげた生涯であった。

（柳澤 潔）

○参考文献

- 故依田勇雄（初代佐久市長）顕彰像建立委員会 『依田勇雄翁顕彰像建立記念誌』（柳中信社）
- 佐久市志編纂委員会 『佐久市志』 歴史編五現代
- 佐久市志刊行会 二〇〇三

佐久の先人たち⑤3

戦後、佐久工業界の起業パイオニア

かし やま まこと
榎山 信

(1913~1979年)



戦後、佐久において多くの企業が創業した。先陣を切り合理的な工場経営モデルを示し、工業界のリーダーシップをとり、ブレーキシューを世界的なブランドに作り上げた。

● 佐久の工業の出発点に立つ

榎山信は、一九一三（大正二）年前山村（現佐久市前山）に生まれた。旧制野沢中学校（現野沢北高校）を卒業し、北牧小学校（現小海町小海小）で代用教員を勤めたが、一九才で上京、自動車部品販売店に勤め、やがて独立して榎山商店を名乗り、自動車部品業界に一步を踏み出した。

当時東京には、部品販売業では最大手のエンパイヤ自動車があった。小諸の柳田一族の柳田諒三が

一九一三年日本橋で創業した会社で、佐久から多くの方が就職していた。榎山はトラック、バスの修理部品をそこから仕入れ、奉天（現中国瀋陽市）や台北に滞在しながら、満州（現中国東北部）や台湾に輸出した。軍需もあり商売は順調だった。

まさ子夫人とは台北で一九四一年に結婚する。エンパイヤ自動車で、大沢村（現佐久市大沢）出身の同世代の岩波角平と知り合い、二人は終生の友となる。岩波は一九七三年から二年間にわたってエンパイヤ自動車の社長を務めた。昭和10年代、自動車産業は発展していく工業社会を象徴する彼らの夢があった。

榎山は一九四三年に召集され静岡連隊に配属となったが、戦地に行く前に終戦となり、一九四五年一〇月三歳のとき、故郷佐久に復員してきた。翌年の五月、野沢の南町（現佐久市原）に榎山商店を開く。東京のエンパイヤ自動車などの商社から修理部品を仕入れて佐久で売ることに、また佐久の地元で製造した自動車部品を東京の商社経由で売ることを計画した。仕入れと販売に同じルートを使う考えである。

国内はバス、トラックが走り始めたところで、地元ではそれほど売れるわけではなかったが、全国の修理部品となれば作れば売れる。榎山は疎開していた国枝合金という鑄物会社が持っていた銅合金（摩耗に強く軸受けに使われた、砲金ともいう）で、車体



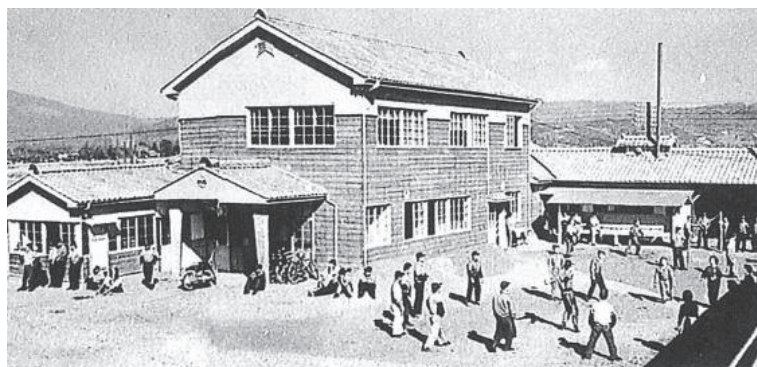
軸受け（ブッシュ）

属協同組合を作る一方、東京へ引き揚げていく鑄物工場の設備を買い、持っていた機械工場と合わせ翌年榎山工業を設立した。

● 疎開工場と佐久の発展

一九五四（昭和29）年、疎開中の東京工機（大蔵省所有、のちTDK社長となり佐久市進出に寄与する）のプレス機器及び菊池合金の設備を手に入れ、野沢の取出に土地を買って、工場を造った。佐久には津上製作所をはじめ高見沢電機、双信電機など大小たくさん疎開工場があった。終戦でいったん工場を閉めたが、やがて民需製品として、津上製作所はミシン、高見沢電機はリレー（継電器）、双信電機はコンデンサーを作り始めた。佐久の戦後の工業は、疎開工場を抜きにしては語れず、特にこれら3社はその後佐久地域に仕事と技術と人材を輩出していく。

地元のいくつかの会社が疎開工場の機械を買い取り、起業していった。佐久に残っていた疎開工場も



昭和30年代の取出工場（廃校になった小学校校舎を移築した）

要部品）が高い評価を得、エンジンパイヤ自動車にとつても榎山の名付けたMKブランドのブレーキシューは有力な販売アイテムとなった。一方、中央樹脂工業は東京都墨田区にある吉田工業の社長吉田重喜の依頼により資生堂の化粧品容器

再開し、一九五〇年からの朝鮮戦争による特需もあり、工業の基礎が築かれた。疎開工場から機械を買い取り、その技術と人脈を生かして生産規模の拡大と新製品を開発していく手法は、戦後の佐久の工場起業のモデルであり、榎山はその先駆者であった。一九六〇年に、榎山プレス工業とプラスチック樹脂の中央樹脂工業を設立し、榎山工業は弟の理一郎が経営することとなった。榎山プレスは、エンパイヤ自動車の岩波の示唆ではじめたブレーキシュー（回転する車軸を挟んで車を止めるブレーキシステムの一部、摩擦でシューが減るので修理に必要な重

の加工をはじめ、のちに長野吉田工業と社名を変える。

一九七八年には、金型専門の榎山金型工業を独立させる。プレスもプラスチックも金型が品質を決める。それを他者に任せておけないというのが信念である。榎山は今の仕事を守りながら常に新しい分野への進出を企画していた。

● 地域工業発展の礎

榎山は地域の工業発展にリーダーシップを発揮した。できたばかりの佐久共同職業訓練所（現佐久高等職業訓練校）へ機械を寄付して充実に努め、工業界のとりまとめに、一九六一年佐久市工場協会を立ちあげた。また、工場経営に品質管理と合理的経営を取り入れるよう提唱、工場協会は一九七四年に佐久市と共催で「わが社の合理化事例発表会」を始める。行政が参加する研修発表会はまた珍しかった。

彼の手腕は佐久市の工場誘致にも発揮された。「金の卵」として青年層が都会に集団就職していく時代、地元復興のため工場を誘致しようとの動きが出てきた。工業界には「大手工場が来たら労働者が集まらなくなる」という反対もあったが、榎山を中心に地元工場を説得し、東京トランジスタラジオに続き、市の悲願ともいえる大規模工場、TDK磁気テープ工場の誘致に成功したのである。

岩村田・中込・野沢・東村商工会は一九六五年に

合併して佐久市商工会を設立し、長年の願望であった商工会議所を作る。榎山は工業界から協力した。一九六八年に商工会主催の「第一回工業展」を開催した。両者の協力の下に通商産業省（現経済産業省）の認可を得て、一九七〇年に佐久商工会議所が発足し、榎山は二代目の会頭に就任したが、病に倒れ、一九七九年六六歳で亡くなった。その後工業展は試行錯誤を重ね、現在、全商工部門や大学、牧場などの参加する開かれた「さく市」へと発展した。

ブッシュから始まった榎山工業は水中ポンプ、スノーマシン、真空ポンプと技術開発を続け、いま半導体液晶向け真空ポンプでは世界第2位のシェアを誇り、年商一六八億円（二〇一四年度）。一方榎山プレス工業はその後エムケーカシヤマと社名を変え、長野吉田工業やグループ一〇社で年商一七〇億円となり、両グループとも地域の中核企業に発展している。

（高橋武彦）

○参考文献

- 佐久市志編纂委員会『佐久市史』第四巻 一九九六
- 佐久市志編纂委員会『佐久市史』第五巻 二〇〇三
- 白田町誌編纂委員会『白田町誌』近現代編 二〇〇九
- 北佐久郡志編纂委員会『北佐久郡志』第三巻 一九八三

佐久の先人第一次選定の18名

1	市川五郎兵衛	1572～1665	〈用水開削の祖〉米は古くから日本人にとって、いちばん大切な食べ物であるが、水がないと稲が育たない。五郎兵衛は多くのお金と砥石山のトンネルを掘る技術をつかって用水を完成させて広い水田を切り開いた。
2	臼田丹右衛門	1776～1857	〈佐久鯉を改良した〉海から遠い佐久では、鯉は生きたまま料理できる食べ物として大事にされてきた。その鯉と淀川から運んだ鯉を交配させて、おいしく栄養のある鯉を育てた。佐久の人々の努力と工夫によって、鯉料理は佐久のおいしい味として人々を喜ばせている。
3	市川代治郎	1826～1896	〈旧中込学校を建てた棟梁〉江戸末期、築地西本願寺修復で自信を得た市川代治郎は、アメリカにわたって洋風建築を学んだ。帰国後郷里の学校建築の設計・施工を引き受け、現存する洋風学校建築では最も古い中込学校を完成させた。
4	大給恒	1839～1910	〈五稜郭築城と日赤創設〉五稜郭といえば、全国ほとんどの人が函館と答えるが、それが信州にもある。佐久市田口の「もう一つの五稜郭（龍岡城）」は青年藩主松平乗謨（のち大給恒と改名）が、激動の幕末に築いたわが国最後の城である。
5	神津邦太郎	1865～1930	〈西洋式牧場をつくった〉明治の世に入ってヨーロッパから多くの食べ物が入ってきた。神津邦太郎は田や畑にならない山の斜面を利用して、牧草を育て乳牛を飼い、バターをつかって日本人の体力を向上させようと願った。
6	佐藤寅太郎	1866～1943	〈信州教育の充実に尽した教育者〉信濃教育会会長を15年つとめ信濃教育会の基礎を築くとともに、長野県立工業学校（現長野工業高校）の設立、松本高等学校（現信州大学）の誘致、長野県立図書館の設置、信濃教育会館の建設など、信州教育の充実に尽した教育者。
7	大井富太	1868～1928	〈佐久欽道をつくった〉明治になって佐久へ信越線が入ってきたが、北の浅間山のおもとを通っていた。南佐久の人々は大井富太を中心に、みんな力を合わせて、小諸から小海まで蒸気機関車を走らせ、人々に便利を与え、産業を発展させた。
8	神津藤平	1871～1960	〈ふるさとを想い志賀高原と命名した実業家〉神津藤平は若い頃から薬用人参・牛馬の改良・発電・銀行と佐久の産業を発展させた。彼はさらに夢を広げ、河東鉄道、長野電鉄そして志賀高原の観光開発へと、事業ひと筋に88年の生涯を生きぬいた信念の先覚者である。
9	比田井天采	1872～1939	〈現代書道の基礎を築いた書家〉書の研究を深めた天采は、中国古典の用筆法を発見して書道界に大きな影響をもたらし、ここから現代書道の新しい潮流が生まれた。書家として初めて芸術院会員となった天采、また故郷をこよなく愛した人であった。
10	桜井弥一郎	1883～1958	〈早慶第一戦の勝利投手〉日本の野球は、王・長嶋の登場でプロ野球の黄金時代を迎えたが、それまでは学生野球が人気の的で、その開幕を飾る早慶戦第一戦は慶應に凱歌、桜井弥一郎は歴史に残る勝利投手に輝いた。
11	川村吾蔵	1884～1950	〈アメリカで活躍した彫刻家〉アメリカで彫刻を学んだ川村吾蔵は、酪農家の依頼で「完全なる乳牛模型」を制作し、牛のGOZOと名を高めた。彼は野口英世、ツツカーサーなど名高い人々の胸像を造ったが、それは深い人間性を表現するものであった。
12	小林多津衛	1896～2001	〈平和と民芸を語り続けた教育者〉柳宗悦や武者小路実篤の影響を強く受けた小林多津衛は、その精神を教育に生かし、民芸の普及と平和実現のために生涯をささげた。部志編纂や天采研究はその後の地域文化発展に大きな役割を果たしている。
13	田河水泡	1899～1989	〈のらくろ描いて半世紀〉戦前の小学校へ通った人なら、誰でも忘れないマンガは『のらくろ』だろう。当時の子どもは兵隊ごっこが大好き、という世相に乗って、のらくろを兵隊に仕立て、10年にわたって連載、戦後篇を加えると、実に半世紀も愛された長編マンガだ。
14	丸岡秀子	1903～1990	〈農村女性の解放に生涯をささげた〉土に根を張って生きる女たちに、秀子は自分の思いをやさしく、時にきびしく教えてくれ、それは母親のような存在だった。評論や多くの執筆を通して、心から平和を願い命の大切さを説いた。
15	山室静	1906～2000	〈アンデルセンやムーミンを日本で紹介した詩人〉旧制野沢中学を卒業後、小学教員を経て上京、職を転々とした後、東北大美学科卒業。日本女子大教授を勤めながら、神話や昔ばなし等の研究を続け、北欧諸国の児童文学を紹介。ムーミン・シリーズを輸出して「ムーミンを連れきた人」と呼ばれる。
16	竹内好	1910～1977	〈日中友好に尽した文学者〉太平洋戦争の応召直前に『魯迅』を執筆、戦後は日中国交回復の障害になるとして新安保条約強行採決に抗議し、東京都立大学教授を辞任するなど、近代日本のありかたを中国との関係のなかで問い続けた現代中国文学者。
17	若月俊一	1910～2006	〈農民とともに地域に生きた医師〉わずか20床の農協病院に赴任した若月俊一は、地域の人々のために寝食を忘れて診療し、健康管理活動や農村病の研究も進めた。彼の「弱い立場の人たちと生きる」精神は地元の熱意にも支えられ、ベット1,000余床、職員1,900人の病院に発展させた。若月の名は、農村医療と農村医学の開拓者として、国内だけでなく、海外にも知られる。
18	井出一太郎	1912～1996	〈清藤一筋の歌人政治家〉三木内閣の官房長官だった井出一太郎は、閣議の席で岩波文庫の「日暮朝」を配った。これは信州松代藩の家老恩田木上が財政窮乏のなか、その改革に当たったときの記録。国政に当る者もこれを経典の書として必読をすすめた。歌もよむ文人政治家らしい政治姿勢だ。

佐久の先人第二次選定の18名

19	小林孫左衛門 こばやしまごぞえもん	1721～1756	〈宝暦運動の中心的農民〉小林孫左衛門は割元という重職にあったが、役所の年貢収奪に強い不満を持っていた。1754（宝暦4）年、浅間山の噴火に早越が重なったため、強い義侠心から仲間とともに全藩一揆を主導したとされている。
20	松本 谷吉 まつもと たにきち	1836～1923	〈日本で初めてカラマツ育苗を成功させた〉荒れた山林に緑を取り戻そう、カラマツは成長も早く、建築・橋梁・杭木など用途も広い、農業と商産で暮らしていた二人は、この苗を生産して植林に役立てたいと考え、日本で初めて種子からのカラマツ育苗を成功させ、世界の緑化に大きく貢献した。
21	清水 清吉 しみず せいきち	1848～1902	
22	市川 文三 いちかわ ぶんぞう	1838～1909	〈明治政府に尺度統一を建言した〉明治のはじめ、市川文三はこれまでばらばらだった尺度を統一するため、私財を投じて再三にわたり政府へ建言書を提出した。こうした行動は後の「度量衡取締条例」や「度量衡法」制定へとつながることとなった。
23	依田 稼堂 よだ かどう	1851～1914	〈塾を開いて漢詩文を教えた先生〉東京で漢詩文を学んで帰った稼堂は、友人たちと学びあいながら、多数の漢詩文を作った。また佐久の野沢・岩村田・前山・桜井などで塾を開いて、1,000人を超す人々に漢詩文を教えた。
24	岡村 政子 おかむら まさこ	1858～1936	〈明治の先端を生きた石版画家〉明治初期に佐久から上京した政子は、正教会の女学校に寄宿しながら、日本初の公立美術学校であった工部美術学校の一期生として洋画を学んだ。その後、夫の岡村竹四郎とともに石版印刷会社信陽堂を起し、数々の石版画を世に送り出した。
25	瀬下 清 せじち せい	1874～1938	〈信州財界の救世主〉三菱の会長でありながら、その生涯を“銀行小僧”で通した金融マン。昭和恐慌で危機にひんした信州二大銀行を統合、「八十二銀行」として誕生させた功績は、信州経済史に不滅の光を放っている。
26	篠原 和市 しのはら わいち	1881～1930	〈全生涯を小海線全通に〉一介の新聞記者ながら、小海線全通期成同盟委員長になり、その生涯を小海線にささげた政治家。だが、全通を前に急死、晴れの祝賀会では小海線全通功労者として、その名を呼べども彼の姿はなかった。
27	神津 猛 こうづ たけし	1882～1946	〈佐久の文化と産業を支えた〉志賀の豪農に生まれた猛は、若い頃に東京で学んだ学問を故郷に生かし、佐久の考古学や文学を育てた。日本の産業が近代化すると、家の資産をもとに銀行を開いて、東北信の製糸業を支えた。佐久の文化を高め、金融や産業の発展につくした人であった。
28	小池 森太郎 こいけ もりたろう	1887～1933	〈佐久に自動車交通網を築いた〉自転車のスピードにあこがれ、野沢で自転車店を開いて佐久の人々に自転車を普及させた森太郎は、自動車が走るようになると、乗台自動車やトラックを走らせて人々に喜ばれ、産業の発展に大きな貢献をした。
29	小池 勇助 こいけ ゆうすけ	1890～1945	〈女子学徒の命を救った軍医〉郷里で眼科医院を開業していた小池は、戦争の渦に飲みこまれ、軍医として各地に出征。最期の地となる沖繩で学徒隊の少女らを預かることとなる。戦闘が激化し命の危険が迫る中、少女たちに「絶対に死んではならない」と最後の言葉を伝えた。
30	柳本 みつゆ やなぎもと みつゆ	1894～1976	〈3,000人を超える赤ちゃんをとりあげた助産師〉戦中戦後の苦しい時代、女手一つで8人の子供たちを育て上げるかたわら、みつゆは助産婦として3,000人を超える赤ちゃんをとりあげた。自分の苦勞を外に出さず、地域の人たちのために尽した善行の数々は、永遠の母として今なお語り継がれている。
31	森泉 武重 もりいずみ たけしげ	1903～1988	〈平根発電所と浅間病院の創設に貢献した〉農業用水路を利用した自家水力発電所を建設し農村電化を促進すると共に、村内に工場を誘致して村の活性化を実現した。また、国保浅間病院創設のため、東京大学に医師派遣をねばり強く懇願し、その実現に貢献した。
32	中澤 周三 なかのさわ しゅうぞう	1907～1991	〈五郎兵衛用水中興の祖〉県営土地改良事業への早期取り組みに併せて市川五郎兵衛翁の遺徳を継ぎ、五郎兵衛用水の大改修と鹿曲川から駒ヶ原台地への用水の開業に情熱を燃やし、地域発展に貢献した政治家。
33	相馬 遷子 そうま せんし	1908～1976	〈中央俳壇で活躍した近代俳人〉野沢町（現佐久市野沢）に生まれて、親の転居に伴い小学生の時に一旦この地を離れたが、何かの力に引き寄せられるように、生まれ育った父祖の地へ戻り医院を開業し、そして中央俳壇で有力な俳人として活躍した人。
34	田中 文雄 たなか ぶんお	1910～1998	〈緑とともに生きた生涯〉「太陽は緑を呼び、緑は平和と生長のしるし……」。王子製紙の社長だった田中文雄は、同社の創立百周年記念碑にこう列んだ。彼は緑が好きだ。その緑多き木村を原料とする製紙業界の道を歩み、緑とともにその生涯をつらぬいた。
35	吉沢 國雄 よしかぜ くにお	1915～2008	〈インスリン自己注射への道を開いた医師〉インスリン自己注射の保険適応に尽力するなど長野県の糖尿病診療の礎を築いたパイオニアである。また保健・予防活動にも積極的に、住民への啓発活動、人材育成から診療にいたるまで真の「地域医療」を実践した。
36	松井 康成 まつい こうせい	1927～2003	〈人間国宝に認定された陶芸家〉佐久に生まれ、茨城県笠間町の住職となった松井康成は、「練上」という手法で新しい陶芸の世界を生み出し、人間国宝に認定された。彼の作品には物と心の統一があるという。没後、遺族から信濃美術館へ100点におよぶ作品が寄贈された。

第三次選定の佐久の先人について

平成22年より始まった「佐久の先人検討事業」は、第一次、第二次それぞれ18名を選定し『広報佐久・別冊』として発刊すると共に、平成26年には、36名の紹介文をまとめた『佐久の先人』の冊子を刊行いたしました。また、それまでの先人のタペストリーを作成し、様々な機会を捕え展示し周知に努めて参りました。さらには、学習の場で活用して頂くために、紹介文の朗読CDを作成し、市内小中学校に配布いたしました。

この度、第三次といたしまして、17名の先人が加わり53名となりました。これまで同様に広く、佐久市民の皆さまにご理解が深まりますよう工夫を凝らして参ります。

この事業は、現在の佐久市を故郷とし、様々な分野で歴史的な活躍をされた方や地域や国の発展の礎となり大きな貢献をされた方、佐久に暮らす人々にとって欠くことの出来ない役割を果たされた皆さまをご紹介するものです。先人の皆様の思いは、「未来の佐久の人々」の豊かさや幸福を願っていたものと確信しています。そして、先人の皆様の脳裏にあった未来の佐久の人々とは、まさに現代に生きる私たちであり、これから生まれてくる人々なのです。私たちの豊かさや幸福を齎してくださった偉業を知る事は、私たちの務めだと思えます。

志を果たして いつの日にか帰らん 山は青き 故郷 水は清き 故郷

私は、この先人検討の事業は、53名の先人の偉業が人口に膾炙され、その価値が十分に理解される事により、御霊が「故郷、佐久に帰る」大切な道筋なのではないかと思っています。

この事業には、極めて多くの皆様の思案、考察、研究、調査、協力、議論、執筆、添削……表現尽くせぬご協力を賜りました。そして、ご協力を頂いた全ての皆様の共有出来た思いは、先人への感謝と54人目の先人が生まれる事への希望だと思えます。

改めて、ご協力を賜った全ての皆様に衷心より深く感謝申し上げる次第です。そして、この書を手にした、未来の人々におかれましては、先人の偉業を理解し、その先の人々に繋いでくださいます事を切に願うものであります。

平成28年2月 佐久市長 柳田 清二

検討を終えて

平成22年8月に第1回の先人検討委員会を開催してから、5年余りが経ちました。この間、監修者の先生方、委員のみなさん、そして市民の方々から寄せられた先人は200を超える人数になりました。委員会では、このお一人お一人について検討を重ね、協議をくり返し、監修者と委員の投票で掲載する方々を決定致しました。第一次で18人、第二次で18人、そして今回の第三次で17人、合計53名を選定させていただきました。

選定した後、監修者、委員、また委員以外で専門家の方々に原稿を執筆していただきました。その原稿を委員会で検討するのですが、その時代の歴史的視点から文章表現に至るまで、議論は長時間に及び、午前から夕方まで会議を続けたこともありました。執筆者の方々は、私たちの要望に応じて気持ちよく4回も5回も原稿を書き直してくださいました。そして平成27年12月まで、検討委員会は35回を数えました。

この5年の間に、重要な役割を果たして下さったお二人の方を失いました。初代の委員長を務めて下さった中嶋長市郎さん、浅科地区からただ一人の委員としてご執筆もいただいた佐藤治郎さん、この場をお借りして感謝を申し上げ、ご冥福をお祈り致します。

佐久市は浅間・荒船・蓼科など美しい山々に囲まれ、千曲川とその支流が産業と暮らしを支える大地です。この地に生を受けこの地で、また世界で活躍した人々、佐久の地に移り住み、この地の発展に尽くした人々、その先人たちの熱き情熱を支えたのは、佐久の自然と風土であったことを、この5年間の検討で私たちは改めて実感致しました。

佐久市における先人の検討は、この第三次をもって、一区切りとすることになりました。また何年か後に、新しい視点でこの事業が引き継がれることを期待します。

平成28年2月 佐久市佐久の先人検討委員会 委員長 吉川 徹

佐久市佐久の先人検討委員会（第三次）

委員 吉川 徹（委員長） 中澤 道保（副委員長）

小林 收 佐々木 都 佐藤 治郎 清水 宣子 高橋 武彦 増田 友厚

監修者 伊藤 純郎 中村 勝実（敬称略）

※第一次・第二次選定36名の紹介文をまとめた冊子を500円で販売しています。

■問合せ 佐久市教育委員会 社会教育部 文化振興課 ☎62-0664